

昭和44年3月

秋田県文化財調査報告書第16集

## 岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県教育委員会  
雄勝町教育委員会

# 序

雄勝郡雄勝町上院内にある岩井堂岩陰遺跡が発見されたのは昭和37年のことありました。

当時秋田県教育委員会は秋田県遺跡地名表作成中で、その調査員である山下孫継氏によって発見されたものであります。この岩陰遺跡は第1洞穴～第4洞穴の4つの洞穴からなっており、すでに山下氏によって全洞穴の内外が調査されておりますが、その内第4洞穴は昭和39年以来引き続き調査され遺物においても、本県では最初の貝殻文土器や押型文土器等が発見されて、全国的に注目される遺跡となつたのであります。

そこで秋田県教育委員会では遺跡の重要性を考え、雄勝町教育委員会と連絡をとり、今年発掘調査を実施した次第であります。

調査の結果は本文にあるように新しく埋没した洞穴が発見され、また新しい資料が数多く見つかり、より一層重要な遺跡として知られるようになったのであります。これらの結果をまとめてこのたび報告書を刊行することになりました。

本書の発刊は秋田県の歴史を研究するうえに大きな意味をもつものであり、また学界に寄与するところも非常に大きなものがあると信じております。

については研究者はもちろんのこと、広く遺跡の保存、研究に关心をもっておられる各位のご活用をお願いする次第であります。

最後に調査を直接担当された山下孫継氏、国安寛氏、調査に協力くださった地元雄勝町関係者、秋田大学々生、湯沢高等学校、湯沢北高等学校、増田高等学校、羽後高等学校の生徒諸君の労苦に対し、深甚の謝意を表すものであります。

昭和44年2月

秋田県教育委員会

教育長 伊藤忠二

## 目 次

I.はじめに .....	1
II.調査 .....	2
(1) 遺跡発見の経過 .....	2
(2) 遺跡の位置と現状 .....	2
(3) 発掘 .....	8
第1洞穴の発掘 .....	8
第2洞穴の発掘 .....	8
第3洞穴の発掘 .....	8
第4洞穴の発掘 .....	10
(4) 遺物 .....	24
第1洞穴の遺物 .....	24
第2洞穴の遺物 .....	24
第3洞穴の遺物 .....	27
第4洞穴の遺物 .....	30
III.結言 .....	42

## 図版目次

グラビア1. 第4洞穴第9層出土土器	第2図
グラビア2. 第3洞穴、第4洞穴出土土器	1. 第1洞穴前A、Bトレンチ ..... 18 2. 第2洞穴前庭部発掘 ..... 18
第1図	3. 第3洞穴内部 ..... 18
1. 岩井堂岩陰遺跡全景 ..... 4	4.5. 第2洞穴遺物出土状況 ..... 18
2. 第1洞穴 ..... 4	第3図
3. 第2洞穴 ..... 5	1. 第3洞穴第6～8区の遺物包含層 ..... 19
4. 第3洞穴 ..... 5	2. 第3洞穴第6～8区遺物出土状況 ..... 19
5. 第4洞穴 ..... 5	
6. 第4洞穴、向って左小洞 ..... 5	

3. 遺物出土状況	19	1. Aトレンチ第11層の黒土層	22
第4図		2. 第11層遺物出土状況	22
1. 第4洞穴Aトレンチ第1区第3 層の黒土層	20	3. 第11層遺物出土状況	22
2. 第4洞穴Aトレンチ第4区第3 層の黒土層	20	4. 地下埋没洞穴の入口	23
3. 第4洞穴Aトレンチ第5層の拡 張区	20	5. 埋没洞穴内部	23
4. 第4洞穴Aトレンチ第5層の遺 物出土状況	20	第7図 土器	47
5. 第4洞穴Aトレンチ第7層の拡 張区	20	第8図 土器	48
6. 第4洞穴Aトレンチ第7層の遺 物出土状況	20	第9図 石器	49
第5図		第10図 土器	50
1. Aトレンチ第9層の拡張区	21	第11図 土器	51
2. Aトレンチ第9層の遺物出土状 況	21	第12図 土器、石器	52
3. Aトレンチ第9層埋没洞穴遺物 出土状況	21	第13図 土器	53
4. 水漉し作業現場	21	第14図 土器	54
第6図		第15図 土器、石器	55
		第16図 土器、石器	56
		第17図 土器、石器	57
		第18図 土器、自然遺物	58
		第19図 土器	59
		第20図 土器、石器	60
		第21図 土器、石器	61
		第22図 石器、自然遺物	62

## 測図、表目次

### 測図

測図1. 岩井堂岩陰遺跡位置図	3
測図2. 岩井堂岩陰遺跡平面図	3
測図3. 岩井堂岩陰第1洞穴平面図	6
測図4. 岩井堂岩陰第2洞穴平面図	6
測図5. 岩井堂岩陰第4洞穴平面図、 断面図	7

測図6. 岩井堂岩陰第3洞穴平面図	7
測図7. 岩井堂岩陰第2洞穴Aトレンチ 層序	9
測図8. 岩井堂岩陰第3洞穴Aトレンチ 層序	10
測図9. 岩井堂岩陰第4洞穴Aトレンチ 層序	11

測図10. 第4洞穴第1、2区第3層の 長橋円形土層	16
測図11. 第4洞穴外方部、第3層の円 形黒土層	16
測図12. 第4洞穴第5層の橋円形黒土 層(昭39)	16

表

第1表 岩井堂岩陰第4洞穴の規模	5
第2表 調査概要	8
第3表 第2洞穴A1区および全区の遺 物出土量	25
第4表 第3洞穴各区の遺物出土量	28
第5表 Aトレンチ各区の遺物出土量	30

測図13. 第4洞穴第7層の円形黒土層 (昭40)	16
測図14. 第4洞穴Aトレンチ第9、10 層の黒土層面積	17
測図15. 第4洞穴下層埋没洞穴	17

第6表 第9層土器片の器厚文様別数量	36
第7表 第9層土器片の色調胎土焼成別 数量	36
第8表 第9層土器内面文様別破片数	36

グラビア 1

(第 4 洞 穴 第 9 層 出 土)



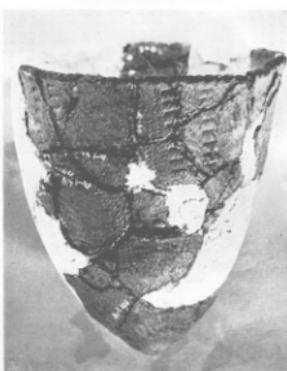
(寿屋写真部 中島 広撮影)

## グラビア2

(第4洞穴第7層出土)



(第4洞穴第7層出土)



(第3洞穴第2層出土)



(第4洞穴第2層出土)



(寿屋写真部 中島 広撮影)

## I. はじめに

従来本県の先史時代史では、無土器時代は勿論のこと縄文早期もほとんど白紙の状態で、洞穴や岩陰遺跡の調査は全く行われたことがなかった。この点近隣諸県に対してもいささか、忸怩たるものを感じざるを得なかつた訳であるが、今回ついに雄勝郡雄勝町岩井堂岩陰において、縄文早期の文化層を6層まで発見し、かつ日本でも珍らしい地下数メートルの埋没洞穴遺跡を発見することができたことは、ただに空白であった本県先史時代史の冒頭を埋めることができたばかりでなく、東北地方先史時代史に対しても貴重な資料を提供するもので誠に意義深く、地元雄勝町は勿論のこと秋田県全体としても喜びに耐えない次第である。

思うに非才無力の私達が発掘を担当して6ヶ月の長年月、困難を極めた作業を克服して、かくも輝かしい成果を収め得たのは一重に下記諸賢の御協力の賜物で、冒頭に記して感謝の意を表する次第である。

本遺跡の発掘調査は昭和38年から42年までの5ヶ月間は雄勝町が独力でこれを実施してきたが、それが同町町長戸部得郎氏、同町教育委員会委員長高橋五郎氏、同教育長小山田文一氏など行政関係諸氏の埋蔵文化財に対する深い理解と関心によって推進されたことは言うまでもないことで、かかる種類の文化的事業を永年継続実施することがいかに困難であるかは思い半ばに過ぎるものがある。

学問上では資料研究から諸報告書の作成に至るまで、終始御懇切なる御指導を戴いた元東大教授、現成城学園大学教授山内清男先生、慶應大学教授江坂輝弥先生、東北地方御在住の関係から度々参上致し、遺物その他について少なからず御助言御示唆を仰いた東北大教授伊東信雄先生、岸沢良介先生など諸先生方の御好意に対しては特記して深甚の謝意を表しておきたい。

その他多勢の作業員のために毎年宿舎を御提供下さった上、各方面に対して陰に陽に絶大な御尽力を貢献した故東海林純太氏、東海林健氏、阿部理一郎氏、鈴木小五郎氏、作業員達を度々御接待御激励下さった現地婦人会の方々など、思えば數千年の長年月岩井堂の地下深く眠りつづけてきた幽遠の文化が、ついに20世紀の光を浴びることができたのは、歴史とその遺跡に対する限りない愛情の結果としての全町民挙げての協力の賜物であったと言わざるを得ないのである。

なお最後におびただしい崩岩と取り組む激しい労働の発掘作業は勿論のこと、測量から実測図の作成、遺物の整理復原に至る調査の全過程を、クラブ活動として毎年くり返し、しかも熱狂的にこれを遂行してくれた秋田県立湯沢高等学校および湯沢北高等学校その他県南高等学校諸校の生徒諸君の、世襲的集団的な奉仕の功績は誠に大きく、まだ成年に達しない学生諸君の文化的貢献もまた決して過少評価してはならないことを、しみじみと感ぜさせられた。

発掘担当者としてはこれら若き考古学者達にも、心からなる敬意と謝意を捧げたい。

## II. 調査

調査担当者 山下孫繼

### (1) 遺跡発見の経過

明治33年頃、院内限山の経営者古河工業所長鈴木審三氏が本遺跡中の第2洞穴内部を、遺物収集の目的で発掘したことがあり、出土遺物をことごとく持ち去ったという言い伝えもあるが、果してどんな遺物をどの程度に持ち帰ったかは現在誰も知らない。その節出土したものの模造品だと称する石製品がただ一つ、第1洞穴内の祭神稻荷神の祭壇で現在三方の代用品として使用されているが、これは脚付石皿を思わせるものである。

その後は発掘の噂もなく、遺物の出ることは現在に至るまで、第2洞穴の祭神不動尊の管理者阿部理一郎氏以外誰も知らなかったようである。

昭和37年秋田県教育委員会が国に協力して、県内埋蔵文化財の一斉調査を実施した際、雄勝郡調査員の佐々木千代治氏と筆者山下および地元協力員の東海林徳太氏、伊藤正氏らが前記阿部理一郎氏の話を聞き込み、第2洞穴内の表面採集を行ってみたところ縄文土器の小破片11片が得られて、これが本格調査の糸口となった。

第2回目には第2洞穴の内壁に沿った3地点（A・B・C地点）を深さ約30cmばかり仮り掘りして合計28片の土師器片と縄文土器片を得、遺物の包含を確認した。その後山形大学の柏倉亮吉教授が観察にこられて第2洞穴内を仮掘りしたが、その際隣接する第1同穴内外からも土師器片が出ることがわかった。

その後筆者山下は第3洞穴前面で土師器片と縄文土器片を合計8片、第4洞穴の前面からも土師器片7片と縄文土器片24片を得て、以上4洞穴を含む岩井堂岩壁の前面には至るところに遺物が埋蔵されていることを確信するに至った。

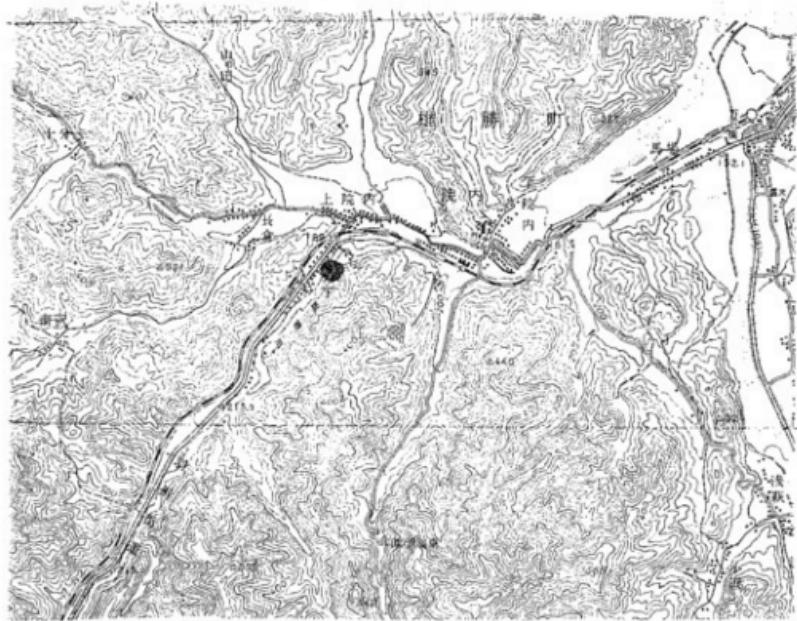
### (2) 遺跡の位置と現状

（遺跡所在地）秋田県雄勝郡雄勝町上院内矢込沢国有林地内（測図1）

本遺跡は秋田県の内陸を南北に貫流する雄物川が、秋田・山形県境の雄勝峰に向って深く山間に入り込んだ沢地にあり、国有林の山尾根部分に露出する凝灰岩壁（全長80m）の前面がすべて先史時代各期の遺跡群（第1図1、測図2）である。海拔は200m、前面小溪流に至る畠地の幅は100m、現在露出している凝灰岩岩壁の高さは2～8mで、その岩壁中には向って左から第1・2・4・3の順序に大小4個の洞穴がある（測図2～6、第1図2～6）。その各洞穴の規模は第1表の通りである。

(測図1)

岩井堂岩陰遺跡位置図



(測図2) 岩井堂岩陰遺跡平面図



(第1図)



1. 岩井堂岩陰道路全景



2. 第1洞穴

(第1図)



3. 第2洞穴



4. 第3洞穴



5. 第4洞穴



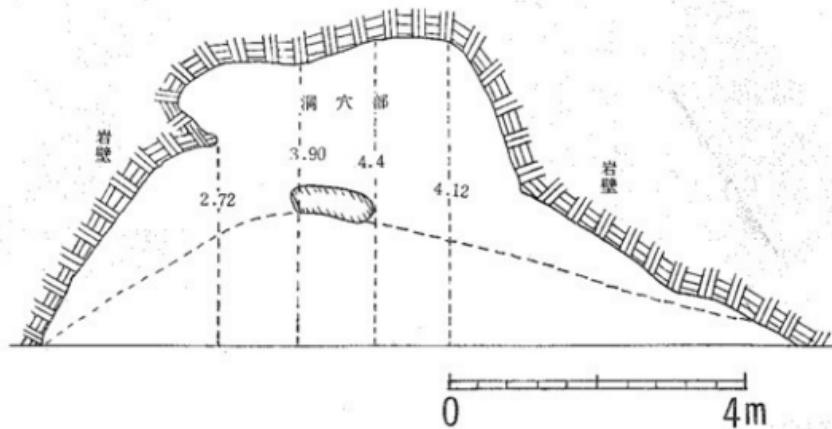
6. 第4洞穴、向って左小洞

(第1表) 岩井堂岩陰4洞穴の規模

洞穴番号	間口	奥行き	天井高	前面延地との比高	横	要
第1洞穴	8.20	2.84	1.95	10		内部で連結する2小洞より成る。洞内祭神は稻荷神
第2洞穴	4.06	4.40	2.05	10		洞内祭神は不動尊
第3洞穴	2.60	1.30	1.48	3		
第4洞穴	向って右小洞	5.10	1.90	1.44	3	第4洞穴の名称は騎り合う2小洞の総称
	向って左小洞	3.70	1.90	1.48		

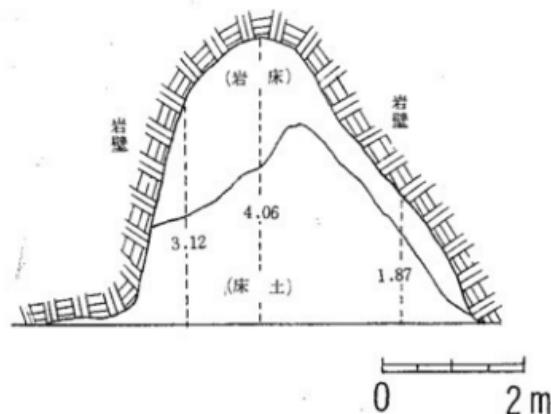
(測図 3)

岩井堂岩陰第1洞穴平面図

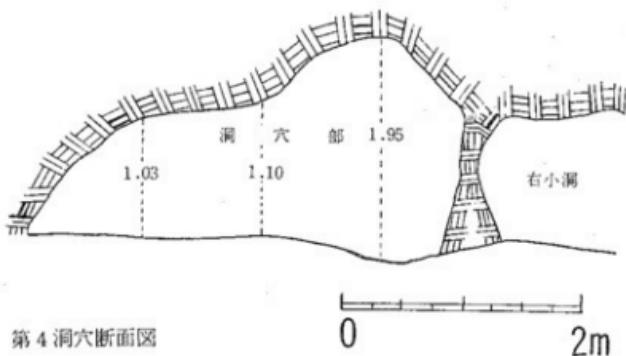


(測図 4)

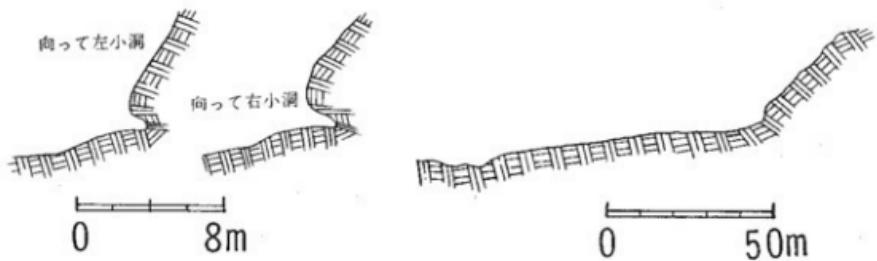
第2洞穴平面図



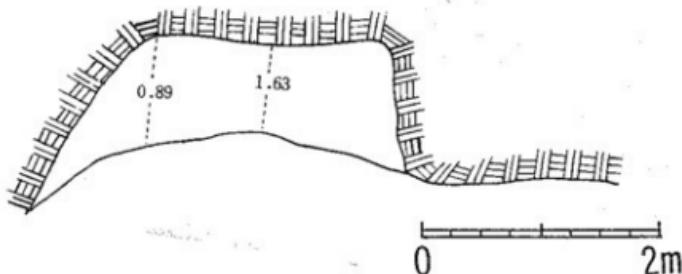
(測図 5) 第4洞穴平面図



第4洞穴断面図



(測図 6) 第3洞穴平面図



### 3) 発掘

発掘調査は昭和38年から43年まで、毎年1回10日間署中休暇を利用して実施してきたが、その調査地点、調査主体者名、調査担当者名などは下表の通りである。

(第2表) 調査概要

調査年度	調査地点	調査主体者名	調査担当者
昭和38年	第1洞穴、第2洞穴	雄勝町教育長 小山田文一	奈良修介
39	第4洞穴	雄勝町教育長 湯沢北高等学校長 小山田文一 同田文進	山下孫綱
40	第3洞穴、第4洞穴	雄勝町教育長 小山田文一	タ
41	タ タ	タ	タ
42	タ タ	タ	タ
43	第4洞穴	秋田県教育長 伊藤忠二	タ

#### 《第1洞穴の発掘》

(昭和38年度) 洞前に2本のトレンチを設定(測図2、第2図1)して発掘にとりかかったが、現在洞穴前面にある土層は大部分本来の土層ではなく、稻荷神の祭場をつくるため付近の土をかき集めて盛土したものだそうである。A・B両トレンチから遺物は少数出土したが、その出土のし方はバラバラで到底原位置にあったものとは考えられないし、洞穴の内外は地下岩盤が急角度に傾斜していて、盛土以前の状態ではほとんど生活を営みうる平坦地が無かったようにも思えるので、一応調査を打切ることにした。

#### 《第2洞穴の発掘》

(昭和38年度) 洞穴内部に横長くA<sub>1</sub>区(奥行1.5m、幅2m)を設定し、これを拡張して洞穴内外にA<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・Awの4拡張区を設けた(測図2、第2図2~5)。然しこの洞穴の直前部には神木の朴の木の大木が立ちふさがっていて、その樹根のためこれら拡張区の完全な発掘調査はほとんど不可能の状態であった。それで結局は洞内中央部に横長く設定したA<sub>1</sub>区のみに重点を置いて調査を進めることにしたが、ここでは傾斜した地下岩盤までの深さ1.26mの間に7層の層位を識別することができた(測図7)。

第1層は黒土層(厚さ約18cm)。第2層は落石を含む褐色土層(厚さ38cm)。第3層は黒色土層(厚さ8cm)。第4層は落石を含む褐色土層(厚さ22cm)。第5層は黒色土層(厚さ12cm)。第6層は灰褐色土層(厚さ8cm)。第7層は灰褐色土層(厚さ20cm)であった。第7層の下部は傾斜した岩盤である。

#### 《第3洞穴の発掘》

(昭和40年度) 洞穴内部から前方へ幅2m、長さ8mのトレンチを1本だけ設定(測図2)し、2m毎に区切りをつけて洞内から第1・2・3・4区とした。

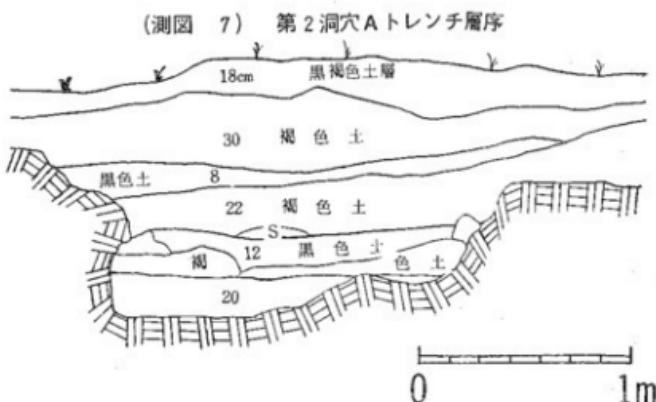
洞内には薄い表土の直下に岩盤があり、この岩盤は約35度の急傾斜角度で洞外に下降していた(測図8)。

黒色の表土層は洞内で10cm、洞外で20cmで第4区まで続く。遺物は全然包含していない。第2層は褐色土層で第1区中央部の岩盤上からはじまり、大体20cmの厚さで第2区まで続くが、第3区に入ると急に肥厚して50cm近くなる。然し第4~5区の第2層は大体20cmの厚さで、その層中からは多数の遺物が出土した。第3層は黒褐色で第3区の中央部からはじまり第4区から第5区へと続くが、厚さは大体50cmで、この層には最も多くの遺物が含まれていた。ところが第4層に当たるものは再び褐色土層となり、その上端部は第3区の上半部で同色の第2層と完全に合流してしまう。一見誤に理解し難い層序であるが、恐らくこれは比高的に上位にある第1区や第2区の第2層が、第3区第4区の第3層が形成された後に雨水や崩壊の関係で流下して、その上にかぶさった結果かと思われる。

ともあれ第3洞穴前では層位の混乱や遺物の混淆が特に激しかったが、このような傾向はむしろ岩井堂岩陰の上層部地層中では一般に見られるところで、遺物は崩壊塊の上面に乗っているものもあれば累積した崩壊の隙間に落ち込んでいるものもあるという風で非常に不安定であったし、永い間にはその崩壊塊や崩壊層自身の陥没やすれなどもあって、上層部に関する限り遺物を層序によって確実に把握することがほとんど不可能の状態であった。

(昭和41年度) 昨年の発掘で既に第3区の中央部まで岩盤が露出し、土層は最早第3区の一部と第4区に残されているだけとなったので、本年度はトレンチの最外端に新しく1区分を追加設定してこれを第5区と名付けた。

第5区の最上層にはほとんど土層がなく崩壊塊ばかりがおびただしく累積していたが、これは最近建築用材採取のための岩質調査で、第3洞穴の巨大な岩底を爆破した際の崩壊で、むしろ人工的な表土というべきである。したがって次位の緻密な土層を第1層として新区第5区の発掘を進めたが、土器石器の頃が出土したのは第1層(黒色土層で厚さ10cm)の下底部から第2層(褐色土層で厚さ20cm)と第3層(黒



色土層で厚さ50cm)を経て第4層(褐色土層で厚さ40cm)の上表部までの間であった。然しその内で遺物の包含が最も濃密であったのは第2層と第3層で、第1層の下底部と第4層の最上層部には遺物が極く少量含まれていたに過ぎなかった。

第5層と思われる地層の上表部(地表下2.5cm)まで掘り下げてみたが、どこまでも黄褐色の崩岩層が続くばかりで、遺物の出そうな気配も感ぜられなかつたので調査を打ち切つた。

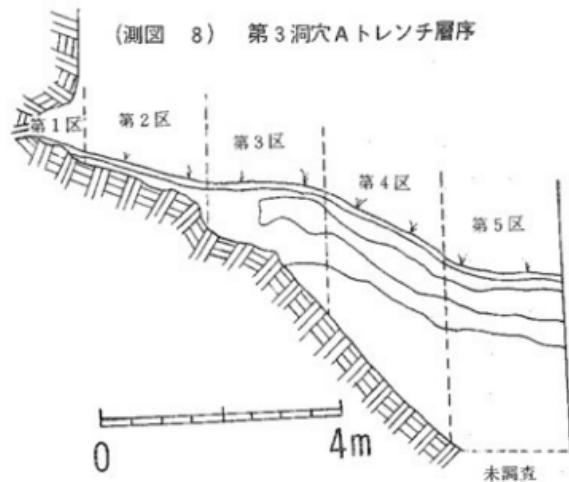
(昭和42年度)昨年度第5区の第2~3層で、本県ではまだ珍しい桜井式土器(弥生期後半)の、復原可能な1個体分の破片を発見したので、本年度は第5区を更に延長して平地部における弥生式土器の埋没状況を調査したいと考えたが、その地点は私有地で交渉もむずかしく、止むを得ず從来のトレンチを第5区から直角に折り曲げて岩壁と平行した第6・7・8区を設定(測図2)し、主に上層部遺物を調査することとした。

新区第6~8区の最上層には、第5区と同様岩質調査のため爆破した岩底の崩岩がおびただしく累積していて、層中には土壠がほとんどなかつた。したがつて第5区の場合と同様次位の緻密な土層以下を調査の対象とした。

既述のように第3洞穴前は崩岩が特に多くてほとんど層序が把握できなかつた(第3図1~3)が、第1層は黒色土層で厚さ20~40cm、第2層は褐色土層で厚さ5~20cm、第3層は黒色土層で厚さ10~20cm。然し以上の3層中には予想以上に多量の遺物が包含されていた。第4層は黄褐色の崩岩層で地表下70cmまで掘つたが、完全に無遺物であったので、一応調査を打ち切ることとした。

#### 《第4洞穴の発掘》

(昭和39年度)向つて左小洞前と向つて右小洞前にそれぞれ幅2m、長さ8mのトレンチを1本ずつ設定し、向つて左側をAトレンチ、向つて右側をBトレンチ(測図2)とした。そして各トレンチとも2m毎に区切つて、洞内から洞外に向つて第1~4区に区分した。ただしBトレンチでは洞外傾斜面の下端部すなわち第3区と第4区だけを掘つて、第1区と第2区とは始めから手をつけなかつた。理由はこのトレンチでは、遺物包含層が洞穴前方部のどの辺まで延びているかを、早く知り度かつたからである。



### Aトレーニチ(測図9)一 (測図 9)

第1層は黒褐色でその厚さは小洞入口から傾斜面全体にわたって平均20cm。この層から遺物は全然出土しなかった。第2層は崩岩を含む褐色土層で、岩壁寄りの第1区と第2区では遺物はかなり豊富であったが、第3区と第4区では崩岩塊の上面や間隙中にまばらに包含されている程度であった。

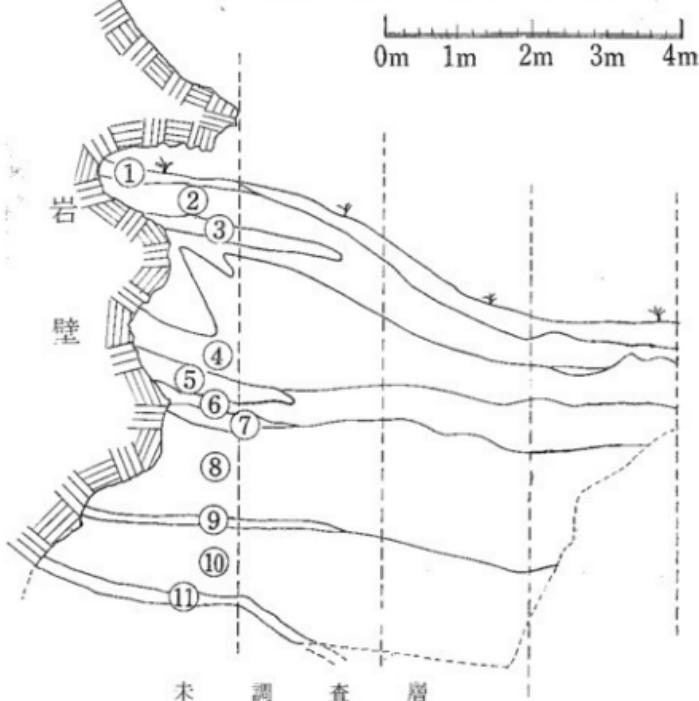
第3層(測図10、第4図1)は第2層の下底部にある黒色土層を特に区別して呼んだもの

ので、その黒土層は第1区から第2区の一帯にまたがるものと、第4区内部だけのものと2個所で発見された。前者は洞内と洞口部を占めて長径3m、短径1m、厚さ20cmの長方形黒土層で、その黒土層の上面右寄りの位置には長径35cm、短径20cm、厚さ10cmの平板な河原石が1個据えられていた。この河原石は黒土層を薄く被り、黒土層に密着していたので生活面に結びつくものと考えているが、炉廻いらしい造構を識別することはできなかった。

第4区すなわち洞前傾斜面の下端部で発見された黒土層(第3層)(測図11、第4図2)は長径80cm短径60cm、厚さ10cmの楕円形で、この層中にも多量の木炭のほか木灰らしい白褐色の薄層が部分的に認められたが、土器片や石器の類は全然発見されなかった。またこの楕円形黒土層から西南方約50cm離れたところに、長径20cm、短径16cm、深さ25cmのやや傾いた柱穴様の小穴が1個発見されたが、この穴の内部から土器や石器の類は全然出なかった。楕円形黒土層の下(第4層)は約40cm程も掘り下げてみたが、黄褐色の崩岩層が続いているばかりであったので発掘を中止した。

第2区の下半分と第3区は急傾斜面で特に崩岩塊が多く累積しており、黒土層(第3層)は全然見当ら

### 第4洞穴 Aトレーニチ層序



なかつたし遺物も上部から流下したものばかりなので、到底生活面とは考えられず、それ以下の掘り下げを中止した。

第1区および第2区の第3層下（測図9）は非常に厚い黄褐色の崩岩層（第4層）で、その厚さは1.7m。遺物は全然発見されなかった。ただしこの層の洞穴奥壁に接したところでは崩岩の大塊が隙間や空洞を保つたままで重なり合い、その部分だけから土器片が僅く少數採集された。思うにこの部分は恐らく、上層の土器包含層が岩壁にそつて崩れこんだもので、出土土器片の型式も上層土層中のものと全然変わらなかった。この陥没部分の下にも第4層の黄褐色無遺物崩岩層が約40cm程の厚さで食い込んでいて、次の遺物包含層（第5層）との間を完全に隔絶していた。

第5層は最初に発見した縄文早期の生活層（第4図3～4）で、われわれはこれを縄文早期第1生活面と呼んでいるが、その黒土層には多量の木炭や鮮かな煉瓦色に焼けた凝灰岩とともにおびただしい土器片と石器類、および小児の頭程の丸い河原石、石斧形の砾石などが隨所に頭を露わし、その遺物埋蔵状況は一見完全にウブな景観を呈していた。

黒色土層の面積は奥行4m、幅3mの長楕円形。土層の厚さは洞内奥壁に密着した部分は薄かったが、奥壁から遠ざかるにしたがって肥厚し、第2区との境界線近くでは30cm掘り下げてみてもなお黒土層が続き、依然として土器片が続々と現われてくるので、われわれは事の重大さに驚き、権威者の助言を仰ぐために、掘り起した遺物だけを収集してなお多数露頭していた土器などもそのままに残し発掘を中止してしまった。

Bトレント——第3区第4区の表土層（黒褐色）はAトレントの場合と全く同様で、遺物は全然発見されなかった。第2層もAトレントのそれと同様崩岩をふくむ褐色土層で遺物は極く少く、到底生活面の存在を期待し得る程の出土量ではなかったので、ここでも発掘を中止し、総力を擧げてAトレント第1・2区の深層調査を進めることにした。

（昭和40年度）Aトレント——昨年度第5層は完掘していなかったので、本年度は第5層の残存部から発掘をはじめた。この第5層下底部からも遺物が出土したが、その量は最早期待した程でなく、その層も間もなく尽きて第6層となつた。この層は厚さ平均10～20cmの薄層ではあったが完全に無遺物で、土色も第5層とは明白に対照的な黄褐色であった。そして更にその下からまたしても黒土層（第7層）が出現した。

第7層の黒土層はわれわれが縄文早期第2生活面（測図9、第4図5～6）と呼んでいるもので、上器片、木炭、焼け石などを多量に包含し、その面積は第1区の大部分を占めて幅1.4m、奥行1.3mの横楕円形を呈していた。黒土層の厚さは第5層のそれよりは多少薄く平均10cm程度。ところでこの黒土層の右2分の1には、黒土層下に炉廻いを思わせる石組（？）（第4図6）があった。ただしその石組の石質は凝灰岩岩壁の崩岩塊ばかりで、大なるものは径40cm、小なるものは径20cmで、大小数個が中央部の

黒土層の最も厚い部分を取り巻き、その両側の組石の平坦な上面から密集した土器片が多数発見された。

黒土層下は再び黄褐色の無遺物崩岩層（第8層）となり、これを約60cm（最深部表土下3.8m）掘り下げてみたが遺物が全然発見されなかったので、本年度の調査を打ち切った。

（昭和41年度）本年度は第1区と第2区のみを引き続き掘り下げることとして、その第8層から作業に着手した（測図9）。第8層は厚さ1~1.2mの完全な無遺物崩岩層で、この地層を更に細分すると上半部は凝灰岩の崩岩塊や、その碎片が水分で分解して黄褐色の砂質土層に変化していた。下半分は次第に川砂を多量に含む砂疊層に変って行き、その最下底からは径5~10cm程度の河原石が多数出土した。

この疊層の下が第9層である。われわれはこれを縄文早期第3生活面（第5図1~2）と呼んでいるが、この第9層もまた多量の木炭と煉瓦色に焼けた凝灰岩碎片を含む黒色土層で、その面積は第1区の全部と第2区の約半分を占めて奥行2.7m、幅は1.9mでトレンチの南北両側壁に食い込んでいた。この黒土層の前方部のはずれには凝灰岩の大塊が故意につくられた土器のように横たわっており、薄く黒土層をかぶつてそこだけが他の床面より20~30cmも盛り上っていたが、それがどのような意味をもっていたかは不明であった。

第1区中央部の黒土層の上面には大小3個の板状河原石（大は長径40cm、短径30cm、小は長径30cm短径20cmで、いずれも厚さは大体10cm程度）が置かれており、上表部の土器片とともに薄く黒土層を被っていたので、生活に関係する配石（？）ではあるまいかと考えているが、第8層の下底部は疊層であって可成り大形の板状石もあるので、それと区別することはむずかしい。

（昭和42年度）第10層は黄褐色の無遺物層で、その厚さは90cm、凝灰岩の岩塊が多量含まれた崩岩層であった。そしてその下からまた遺物を包含する生活層（測図9）があらわれた。これが第11層でわれわれが縄文早期第4生活面と呼んでいるものである。この層も第5・7・9層と同様木炭や焼け石を多量に含む黒土層で、遺物はその黒土層の中からのみ出土した（第6図1~3）。

第11層の下底は第2区の中央部まで背後の岩壁が突き出してきて、格好な岩床になっていた。そして黒土層は岩床が尽くるところから急角度に下降して、地中深く食い入っていた。したがって黒土層の外延部を追跡調査するためには、第2区の下半部は勿論のこと、第3区から事情によっては第4区さえ、掘り下げなければならないことになる。ところが崩岩の大塊を多量に包含するトレンチ側壁の地盤はもう相当にゆるんでいて、作業の響きが何時崩壊を誘発しないとも限らない状態にあったので、残念ながら今年度の調査は打切りざるを得なかつた。

Aトレンチは最初幅2mで発掘をはじめたが、地表下5m以上掘り下げた現在ではトレンチ底面は極度に狭まり、第1区の最も幅広い部分でさえ、1.45m、第2区以下の狭いところでは僅か45cm幅になってしまった。したがって遺物を含む黒土層は当然の結果としてトレンチの両側壁に食い込むこととなり、あらためて地表から5m以上を掘り下げるという大作業でトレンチ幅を拡張しない限り、黒土層の横幅を知

ることができない状態となってしまった。要するに第4洞穴Aトレンチの発掘調査は、現トレンチのままでは最早その限界に到達したというべきであろう。

(昭和43年度) 本年度の作業は何よりも先ずAトレンチを拡張することであった。かくて昨年まで2mであったAトレンチの幅を4mに拡張することとした。これによって従来のAトレンチの各区すなわち第1～4区の北隣りに同じ数だけ新区が設定されることになるが、これを岩壁直下から前方へ向って第5～8区とした。

さてトレンチ拡張作業はいうまでもなく地表から順次掘り下げて行く訳であるが、拡張区第5～8区の第1層(表土)からは遺物は何も出なかった。昭和39年度の発掘では第1区と第2区および第4区から、第2層の下底部で木炭、焼け石とともに多数の遺物を含む黒土層が現われたが、その隣り合わせの第5区と第6区および第8区にはこれが全く存在しなかった。のみならず第5区からは全然遺物が出土せず、第6区の第2～3層からも土器片が僅か1片と小形磨製石斧が1個出土しただけである。これは第4洞穴上層部の岩壁寄りの生活の中心部は旧区すなわち第1～2区の方に片寄っていて、同じ岩壁寄りでも第5～6区の辺りには最早黒土層もなく、遺物も極く少数が散らばっている程度に過ぎなかつたのである。その理由は恐らく、第1～2区の場合には背後の岩壁中に小洞があり、それが寄りどころとなってその前面すなわち第1～2区に生活の中心が置かれたのであろうが、第5区の背後の岩壁中には寄りどころとなるべき凹所や岩底が全く無かったからであろうと思われる。

第7区と第8区は昭和42年度に旧区の拡張区として発掘した場所で、第7区からは土器片42片、第8区からは9片出土していて復原に成功した1個体分の土器なども出土している程であるから、区内に黒土層はなくともそこで或る程度生活が行われたと考えても差しつかえは無さそうである。

第4層は1.4m程の非常に厚い無遺物崩岩層で、これは第1～2区の第4層の場合と全く同じ状態であった。

第5層(地表下約2.6m～3m)は木炭と焼け石を含んだ黒土層(厚さ10cm)で、この黒土層の南側辺縁は第1区および第2区の第5層すなわち縄文早期第1生活面の黒土層と接続していたが、その北側辺縁は第5区と第6区の中で消滅していた。ところがこの第5層の黒土層中からは遺物が全く出土しなかつた。思うにこの黒土層は旧トレンチ第5層の木炭が周辺に散らばったために生じた土色の変化で、層位が同じであるということは確かであるが、遺物がほとんど出土しないということにより、そこが生活の中心部からはずれた場所であることを示すものと思われる。

第6層は深さ地表下2.8～3m、黄褐色の無遺物崩岩層で、その厚さは20～60cm。

第7層は地表下3.3～3.4mで、木炭と焼け石を含む黒土層(厚さ10cm)であった。そしてこの黒土層の南側辺縁は第1～2区の第7層すなわち縄文早期第2生活面に接続しているが、その北側辺縁はトレンチの中で消滅していた。然し遺物はこの黒土層中からは僅か3片出土しただけであった。これを要するに

第7層の黒土層は第5層のそれと同様で、旧トレンチの生活面に接続してはいるが、いずれも生活の中心部からはずれていたと考えるより他ないのである。

第8層は無遺物の崩岩層で厚さ1m。この地層の下部は砂利層および礫層になっていて、その礫層の下底部（第5図2）からは径20cm程の河原石が散きつめられたように多數発見された。このような砂礫層は第1～4区の第8層に於ても見られたもので、現在遺跡の前面100m程の地点を流れている溪流が、縄文早期のこの時期には岩井堂岩場の壙を洗ったこともあったと考えられるのである。

第9層はまた焼け石と木炭を多量に含む黒土層（第5図1～2）で、この層も旧トレンチの縄文早期第3生活面すなわち第1～2区の第9層黒土層に接続していた。ところが第9層の場合第5層や第7層の場合と異っている点は、旧トレンチのそれに勝るとも劣らない程多量に土器石器の類が出土していることと、その黒土層の広がりが第5～6区のトレンチ北側側壁と、まだトレンチ拡張作業に手をつけていない前方部（西方部）の第8区の地層の中にまで食い込んでいること（測図14）である。早くいえば第9層の黒土層は南北両側の辺縁も前方の辺縁もすべてトレンチ側壁に食い込んでいて、その面積は完全に把握できない状態にあるということである。

第10層は地表下4.4～4.6m。黄褐色無遺物の崩岩層でその厚さは約1mである。

第11層は深さ地表下5.4～5.6m。多量の木炭、焼け石を含む黒色土層（厚さ10～20cm）（第6図1～2）で、この黒土層の南側辺縁は第1～2区の縄文早期第4生活面すなわち第11層の黒土層と接続しているし、北側辺縁も第5区のトレンチ側壁に食い込んでいる（測図14）。黒土層下部は岩盤で、その岩盤の尽きるところ（第5区と第6区の境界部）から急角度に下降して地中深く食い入っている点など、第1～2区の第11層の状態と全く同じである。

今年度発掘調査の目的はいうまでもなく昨年度断念せざるを得なかった第11層（黒色の遺物包含層）の外延部を追求すること、および第12層以下の深層を調査することであったが、調査日数が短く、ために拡張作業のみに終ってしまって、昨年度の課題がそのままに残されるという結果になったのは誠に残念であった。

然し最後に特記しなければならない収穫は、深さ地表下4.6mの第9層最奥部の岩壁中に大穴（第6図4）が空いていて、そこから内部に向って広がる立派な埋没洞穴（測図15、第6図5）が発見されたことである。この埋没洞穴は奥行が6.2m、幅3.2mで、洞口部の状態からみると第9層と第11層の二つの黒土層が洞穴内部に向って進入している様子であった。そこで洞内奥部の右側側壁寄りに70cm平方の小ピット（測図14）を設けて仮掘してみると地表下10～30cmの層位から第9層のそれと全く同型式の土器片が43片、石器類が7個出土した。第11層の遺物が洞内にあるかどうかは未だわからないが、来年度の調査では当然明らかにされることと大きな期待をかけている。

なお洞穴内左側壁部には外部の地山の崩土が、天井部から急傾斜面をつくって崩れ込んでいる。（測図

(測図 10)



第4洞穴第1、2区第3層  
の長縦円形黒土層

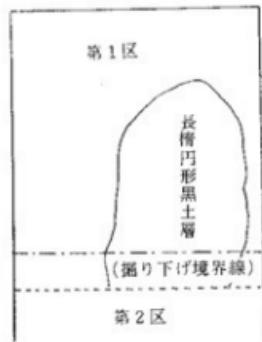
(測図 11)



第4洞穴外方部、第3層の  
円形黒土層



(測図 12)



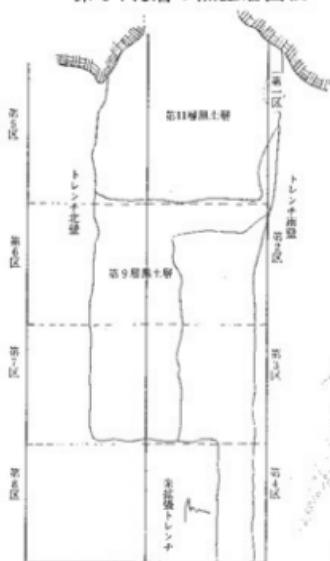
第4洞穴第5層の横円形  
黒土層(昭39)

(測図 13)

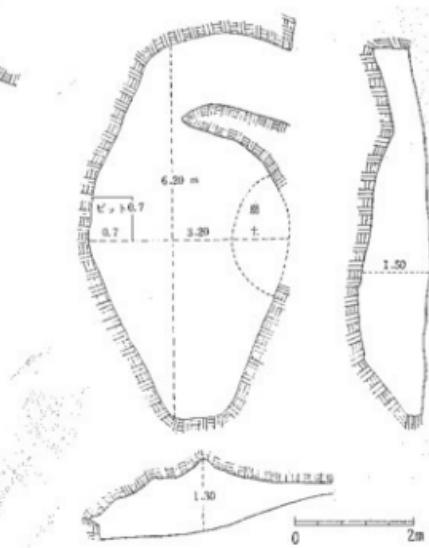


第4洞穴第7層の円  
形黒土層(昭40)

(測図14) 第4洞穴Aトレンチ  
第9,10層の黒土層面積



(測図15) 第4洞穴下層埋没洞穴



15) ので、もしかするとこの部分には外部に通じる別の入口があるのではないかと考えている。もしそうだとするとこの第2の洞口の外面の岩陰にもまた、当然黒土層がある筈で、各々の洞口前面の黒土層は結局外部で結びつくことになり、生活に使用された岩陰の面積（黒土層）は現トレンチの枠を越えて意外な広がりを見せるのはあるまいかとも思われ、夢と期待は愈々膨らんで行くばかりである。

第2図



1. 第1洞穴前A・Bトレンチ



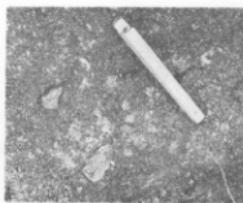
2. 第2洞穴前庭部発掘



3. 第2洞穴内部

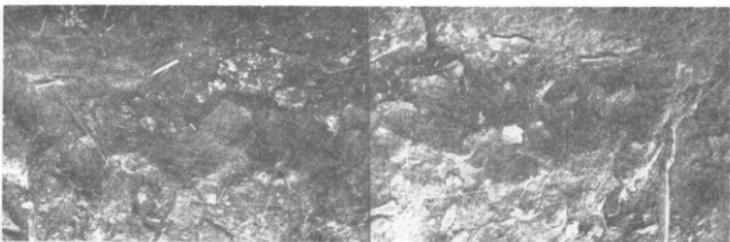


4. 第2洞穴遺物出土状況



5. 第2洞穴遺物出土状況

第3図



1. 第3洞穴第6～8区の遺物包含層（白い割箸が遺物の位置）



2. 第3洞穴第6～8区遺物出土状況（白い割箸）



3. 遺物出土状況

第4図



第4洞穴Aトレンチ  
1. 第1区第3層の黒土層



4. Aトレンチ第5層の遺物出土状況



第4洞穴Aトレンチ  
2. 第4区第3層の黒土層



5. Aトレンチ第7層の拭き区

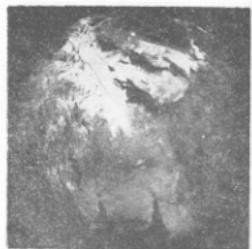


3. Aトレンチ第5層の拭き区

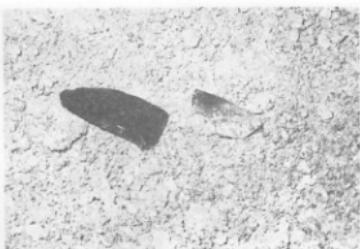


6. Aトレンチ第7層の遺物出土状況

第 5 図



1. A トレンチ第9層の拡張区



3. A トレンチ第9層埋没洞内遺物出土状況



A. トレンチ第9層の遺物出土状況

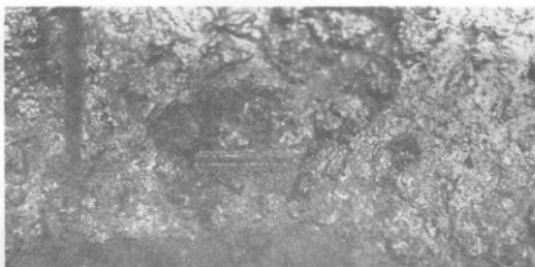


4. 水洗い作業場

第6図



1. Aトレンチ第11層の黒土層



2. 第11層遺物出土状況

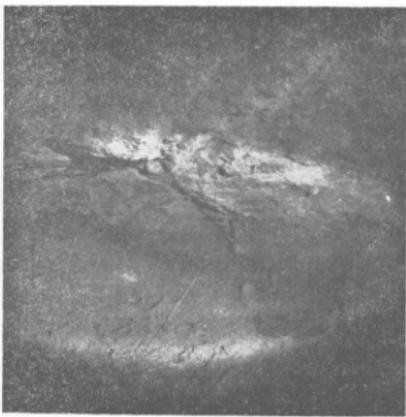


3. 第11層遺物出土状況

第 6 図



4. 地下埋没洞穴の入口



5. 埋没洞穴内部

## (4) 遺 物

### ((第1洞穴の遺物))

#### (第1洞穴の遺物出土量)

第1洞穴の調査は昭和38年度1回きりで、Aトレンチから土器片40片、Bトレンチから土器片8片、合計48片が出土しているが、石器類はA・Bいずれのトレンチからも1片も出土しなかった。

#### ((第1洞穴遺物の型式と編年))

##### 1. 土 師 器

昭和37年の洞口部の試掘の際には土師器片を数片発見した。この破片は現在紛失して見当らないが、比較的目の細かい粘土を用い、器厚もむしろ薄手であったので、ロクロ使用痕や糸切底のものはなかったが、どちらかというと土師時代も後期のものではなかろうかと思っている。

##### 2. 繩文晚期土器片

Aトレンチから出土した細かい横走縄文をもつ、茶褐色砂質粘土の土器片3片（第7図8～10）と、肩折の強い頸部破片2片（第7図11～12）は所属型式がよくわからない。頸部を無文に研ぎ、口唇上面を指頭で押圧して波状にし、その直下に1本の沈線をめぐらせた黄褐色硬燒きの破片3片（第7図1～2）は、当地方の砂沢式（大洞A'式併行）の遺跡で伴出する縄文晚期最末期の土器である。

##### 3. 縄文後期土器片

Bトレンチから出土している明るい淡紅褐色ないし赤褐色で、砂質粘土を用いた薄手の土器片が10片程（第7図3～7）あるが、その内の2片には幽かに細かい縄文の痕が認められるので、これは恐らく縄文後期も後半のもので、新地式（安行I式併行）もしくは金剛寺式（安行II式併行）あたりの実用的土器であろうと思う。

### ((第2洞穴の遺物))

#### (第2洞穴遺物の出土量)

洞内中央部に設定したA<sub>1</sub>区以外はいずれも洞前の神木の樹根や洞内側壁にさまたげられて完掘できなかつたので、全体の遺物出土量と同時にA<sub>1</sub>区のそれを示して参考に供することとする。

第1層に遺物が多いのは不動尊祭神のため地ならしをして表土を削り取っていること、第7層に多いのは多分第7層下の岩盤が傾斜しているため層位の異なる遺物が混淆したことによるものかと思われる。また第5層以下を掘り下げたのはA<sub>1</sub>区だけであるから、第3表中第5層以下の出土数はA<sub>1</sub>区のみの出土数となる。

(第3表)

第2洞穴A<sub>1</sub>区および全区の遺物出土量

層位	土層	A <sub>1</sub> 区の遺物		全区の遺物	
		土器	石器	土器	石器
第1層	黒褐色土層	157	21	227	26
タ2タ	落石を含む褐色土層	27	1	42	6
タ3タ	黒色土層	44	3	49	7
タ4タ	落石の多い褐色土層	43	6	58	6
タ5タ	黒色土層	72	7	72	7
タ6タ	褐色土層	33	3	33	5
タ7タ	灰褐色土層	121	7	121	7
合計		497	48	602	64

((第2洞穴遺物の型式と編年))

### 1. 土師器片

第2洞穴内部からは極く初期のものかと思われる胎土の粗雑な、焼成の脆い土師器片（第7図9）にまじって、極く少数のロクロ使用度ある真間隔分期の土師器片（第7図13～14）も認められるので、初期と後期の両時期にこの洞穴は使用されたのであろう。

### 2. 弥生式土器片

第2洞穴内外は弥生式土器片の出土が相当多い方で、連続弧状文を少しずつずらせながら幾重にも重ねた文様を頭頂部にもつもの（第7図18～19）、口縁部に幅のせまい纏文帯をもち、上下を平行沈線で挟まれた縦位の菱目文を頭部にもつもの（第7図26）などがあるが、これらは岩槻山、南御山、杵形圓式などの系統に属する弥生式の土器片で、秋田県では志藤沢式の仲間と考えて良いものであろう。

### 3. 縄文晚期土器片

口頂部に太い肉彫的平行沈線を数条めぐらし、その下部に細い斜行纏文を刻明に押捺したもの（第7図27～34）は、強度に流線形化した雲形磨消纏文をもつ黒色の破片（第7図35）とともに、青森県の砂沢式（大洞A'式併行）およびそれに伴出する大洞系の土器片である。

### 4. 縄文後期土器片

斜行纏文の地文上に幅の広い平行沈線を数条めぐらせて帶纏文を形成するもの（第7図36～41）は加曾利BⅠ式、胴部に不規則な曲線に画された大柄な磨消纏文をもつもの（第7図42～45）は加曾利BⅡ式で

あろう。

### 5. 繩文前期土器片

この時期の遺物が出土するのは第2洞穴だけで、大木1式以降大木5式に至るもののが多數出土している。

黒色で焼成堅緻、斜行縦文の刻明な土器片（第7図61～62）、羽状縦文で口頭部に穿孔をもつもの（第7図53～55）などは、上川名上層式もしくは室浜式や関山式などを含む広義の大木1式で、横方向漣状を呈する櫛糸文地文の土器片（第7図56～60）や有縫櫛糸の大きな綾格文をもつ破片（第8図71～75）は大木2a式の仲間であろう。

口唇部降帯の外側に横長の刺突文を加え、上胴部の斜行縦文上に細く刻がれ易い貼付文を付したもの、（第8図76）は大木5式である。

その他に茶褐色薄手破片で全面に細かい爪形文を施文したもの（第7図46～52）は、青森県野口貝塚などの上層遺物に見られるものであり、北海道の春日町式土器にもあるとのことで、いずれも縄文前期初頭のものであろう。

### 6. 繩文早期土器片

器厚6mm黄褐色の口縁部破片で焼成が脆く、口縁だけがやや薄くなつて外折している破片が2片（第8図81～82）あるが、その口縁部破片には縦の短い沈線がやや間隔をおいて刻目文風にめぐり、その下部には結束ある横走羽状縦文の結束部の、圧痕が少しく見えている。そしてこの2片の破片の裏面には太目の不鮮明な横走条痕文が認められるが、その他にも裏面に太く不鮮明な横走条痕文をもつ破片で、表面が横走の羽状縦文になっている胴部破片が3片程（第8図78～80）発見されている。表面が縦文で裏面に条痕文をもつ土器は縄文早期末期の東北地方独特の土器であるが、不鮮明な太目の条痕文はその退化形態かと思える。また器面の縦文には横走の羽状縦文が見えるが、横走羽状縦文（第8図63～70）は早期末から縄文前期初頭にかけて盛行する変形縦文である。

下層部から1例だけ出土した尖底土器の底部破片（第8図77）は下端部が多少丸味をおびた砲弾形で、純然たる丸底ではなく無論乳頭状や円錐形でもない。下端部の関係からか器底は厚手黄褐色、纖維の混入なく焼成は比較的良好である。器面には磨滅した下端部以外、全面的に斜行縦文が施されている。この縦文ある尖底土器は前記各種の土器片とともに北海道の春日町式、青森県ムシリ遺跡の縦文ある尖底土器や同県早稻田貝塚第6類土器などの仲間かと思われる。

胴部破片で縫杉状縦文をもつものが約10片程（第8図83～90）あるが、これらは前記ムシリ式や早稻田貝塚第5類土器に見られる縦文早期末の土器片である。

暗褐色で焼成堅緻、一度施文した地文の斜行縦文を半ば磨り消した胴部破片が3片（第9図91～93）あって、その破片の黒褐色の裏面には明確な縦文が印せられている。そしてまたその内の1片は器壁の弯曲

度からみて、尖底土器の縫に割れた底部破片であることが、後になってわかった。この3片の土器片は内面底部まで纏文の印せられた土器の破片で、これらは前記諸土器片よりは時代が少しさかのぼるようで、青森県の赤御堂、長七谷地貝塚などの赤御堂式土器の仲間である。

### 7. 第2洞穴の石器類

この洞穴から出土した石器類の総計は64片で、第1～4層出土のものが44片、第5層以下（纏文前期以前）から出土したもののが20片である。

以下上層（第4層まで）出土のものを省略して、下層（第5層以下）の石器についてのみ説明すると左のようである。

第4層以下の石器類20片の内訳は大形打製石器1、石鏃2、縦形石匙6、石窓1、扁桃形石器2、剝片8片である。大形打製石器（第9図94）は自然面を多少残してその尖端部や基部を加工し、大形の握植状尖頭石器としたもので長さ20cm、大木1・2式に伴う大形石器である。石鏃2個（第9図95～96）は尖端の鋭利な長三角形で、底辺の抉り込みは極くわずかに認められる程度、薄手精巧な押圧剝離で、石質は黒色がかった珪質頁岩である。

縦形石匙7個のうち5個（第9図97～103）は明確なつまみを持っている完全な石匙だが、残りの2個はつまみの明確でない不完全な石匙である。つまみある石匙のうちの1個は柳葉形を呈する美麗精巧な石槍の一端に、両側から欠け目をつけてつまみ部とした変った石匙である。他の4個は幅広の短冊形に近いつまみある石匙で比較的薄手である。明確なつまみのない石匙2個のうち1個は柄部が錐状に尖り、尖端が切出し形ナイフのように斜傾した刃部になっている。他の1個も尖端が切出し形ナイフのような刃部になっているが、その基部は着柄用の打ち欠きが片側に漸く認められる程度で、着柄部の幅は身幅とほとんど同じ程度である。以上2個のつまみの不明確な石匙は一応縦形石匙とみなして良いであろうが、多少用途使用方法がちがうのではないか。

石窓1個（第9図104）は板状の縦長剝片の両側および基部の三辺に粗雑な整形打を加え、尖端の刃部を薄く一直線につくり上げたもので、かかる形態の薄手石窓は本地方では纏文前期初頭遺跡に多く見かける類である。扁桃形石器の2個（第9図105～106）は片面加工、断面は中高である。石質は黒色がかった珪質頁岩。このような石器は青森県の吹切沢やムシリ遺跡から相当数出土していて、江坂輝弥先生が鈎状剝片石器と称しているものの仲間である。

### （第3洞穴の遺物）

#### （第3洞穴の遺物出土量）

第3洞穴は昭和40～42年の3ヶ年間発掘したが、その遺物の総出土量は土器片1,142片、石器類71片で、各区毎の出土状況を示すと第4表の通りである。

(第4表)

第3洞穴各区の遺物出土量

層位	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	計
第2～3層	—	9	17	157	185	—	774	—	1,142

洞穴部を含む第1区は0で、洞前傾斜面に当る第2～3区は漸く遺物が出土しある程度、そして傾斜面の終る頃の第4～5区で本格的に遺物は出土している。第5～8区は第5区から直角に折り曲げたトレンチなので、これらの区の岩壁に対する距離はみな同じで、遺物の出土量は意外に多量であった。これをするに第3洞穴の遺物は岩壁または洞穴直前部ではなく、そこから7～8m離れた前方部で非常に豊富であるということになるが、これは曾て岩底が非常に長く突出していたことと関係するのかも知れな

#### ((第3洞穴遺物の型式と編年))

##### 1. 土師器片

第4区と第5区および第6～8区から出土した土師器片38片(第10図1～6)は底部が掲げ底気味の丸底で器厚7mm、色調は灰褐色で胎土は多少細砂を含み、器面には縦に擦でおろした擦痕の見える粗製土器である。この種の縦に擦でおろした擦痕の見える土師器は当地方では亂書き文字入りの土師器などを出土する遺跡で伴出する実用的な粗製土器であるから、土師時代も後期に属するものであろう。

##### 2. 弥生式土器片

第5区の上層部からまとまって出土した破片(第10図7)は同1個体に属するもので、ほとんど完型に復原できた。高さ20cm、口径15cm、底面直径7cm、器厚5mm、口頭部の軽く外反した壺形土器で色調は暗茶褐色、胎土に多くの砂粒を含み、焼成の余りよくない土器であったが、器面には煮こぼれの炭化物が多量に付着していた。その文様は口縁部から胴部上半部にかけて半截竹管による横走波状文が十段程も重ねられ、その下部には斜行の燃条文が不規則に走っているが、その燃条文はまた下端において網状文に変形している。最下端部約3cmは無文である。この種土器は秋田県でもまだ珍らしいもので、東北地方弥生期後半のいわゆる桜井式土器であるが、その中では比較的早い時期のものであろう。

##### 3. 繩文晩期土器片

第7区出土で口唇上面に二叉状の小突起をもち、口頭部に1条の縄文帯をめぐらせている破片1片(第10図15)は三叉状沈刻文をもつ安行I-a式であろう。

第4区で平口の急須形注口土器の注口部と、磨消褪文ある口頭部および無文に研いた丸底の破片合計43片(第10図16～27)が出土したが、これらはみな同一個体に属するもので、平行沈線間に刻目が多く、四つ葉文を連想させる磨消褪文があるところから見ると大洞C<sub>1</sub>式であろう。

無文の外反した口頭部破片で、口唇上面を指頭で強く圧しつけて波状口縁にしたもののが数片(第10図8

～13)と、比較的頸部の長い、無文の外反する口頭部破片で上端部だけが隆起線状に肥厚し、その上に撚糸文を装飾的に押捺した破片1片(第10図14)とが出土しているが、これは当地方の砂沢式(大洞A'式併行)の遺跡で伴出する土器片に似ている。

#### 4. 繩文後期土器片

大きな山形口縁部に橋状把手をもち、その把手の下に沈線の同心半円文が見え、それを起点として沈線文様が下方に展開する破片3片(第10図28～30)、沈線渦巻文をもつ1片(第10図31)、山形口縁の山形部に大きな窓文をもち、そこから下方に沈線文様が広がる破片1片(第10図32)、太い曲線沈線に画された磨消繩文が下脚部に見える底部破片2片(第11図33～34)、などはみな繩文後期も初期のもので壠之内1式に併行するものである。

横走平行の亂文帯をもつものが31片(第11図35～45)あり、その上に縦位のS字状沈線文を加えたものが11片あるが、これらは無文の大きな波状口縁をもつ5片(第11図46～50)とともに加曾利B1式土器である。斜行繩文地文上に太くて浅い弧状沈線で画した磨消繩文ある土器片16片(第11図51～60)の大部分は加曾利B2式に属するものと思う。

茶褐色で胎土に砂質粘土を用いた副部および底部破片で、反対方向の斜行繩文を交差させて柔らかな羽状繩文にしたもののが数片(第12図73～76)ある。この土器片と同じものは第1洞穴のAトレンチからも出土している。その形式編年は不明であるが、繩文中期以前とは考え難いので、整理上後期で取扱っておく。

その他に細条痕文の土器片が非常に多く109片(第12図61～67)ある。その内条痕が円に近い弧状をえがくものが55片、直線または直線に近いものが33片、斜格子目をえがくものが2片である。これらの条痕はみな非常に纖細な条痕で、異方向の直線条痕を交差させたり、反転連続させたりして可成り複雑なものが多く、加曾利B2式などに伴う粗大な条痕とは可成り趣がちがっている。したがってこれらの大部分は新地式(安行I式併行)に伴う纖細な条痕文土器片ではないかと考えている。然しそれにしては細条痕文以外で新地式もしくはそれに近い金剛寺式(安行II式併行)の特徴をもつ土器片が、急須形注口土器で、真中に切れ目のある突起を副部にもつ破片が7片(第12図68～71)と、小突起が二つ並び細い繩文の磨消繩文帶ある破片が2片(第12図72)あるだけで、意外に少ないのでどういうわけであろうか。

#### (第3洞穴の石器)

第3洞穴石器の総出土数は71片で、岩壁が急傾斜する第1～2区の間は土層が浅かったせいでもあろうが、石器は全然出土しなかった。第3区ではじめて石器類が出はじめ第4～8区からは可成りの数量出土したが、定型的な石器は比較的少なかった。

剥片以外のものを示すと、つまみ部の不明確な縦形石匙が3個(第12図82～84)、頸部に流水文の美観な彫りをもつ小形の片頭石棒(緑色)が1個(第12図77)、打製縦形石斧が1個(第12図85)、磨石3個

(第12図78~80)、四石4個(第12図86~89)などが出土している。

なおその他に第5区から、長さ2cmで尖端の鋭く尖った小縦長剣片をそのまま利用したような粗末な石鎌が1個(第12図81)出土している。この石刀の基部には底辺のやや上方に、側面から打撃を加えてつくった粗雑な柄部が認められるが、その柄部の末端は尖らずにむしろ末広がりに太くなっている。これは当地方をふくむ東北地方から北海道にかけての弥生式石器の一つの特徴である。

#### ((第4洞穴の遺物))

#### ((第4洞穴の遺物出土量))

第4洞穴Aトレンチの遺物の総出土量は土器片1,649片、石器類が450片で、Bトレンチが土器片17片石器類が皆無であった。次にAトレンチ各区毎の出土状況を示すと第5表のようである。

(第5表) Aトレンチ各区の遺物出土量

区名	1	2	3	4	5	6	7	8	水こし	地下洞穴	計
第2~3層	99	80	74	5	3	1	42	9			313
5	229	10									239
7	181					3					184
9	156	112			72	37	116		239	43	775
11	29	39			1	1	5		63		138
計	694	421	74	5	76	42	163	9	302	43	1,649

第5表はAトレンチ第1区から第8区までを区名番号順に掲げた訳だが、背後の岩壁に対する関係位置からいと第1区と第5区の合計は770片、第2区と第6区の合計は283片、第3区と第7区の合計は237片、第4区と第8区の合計は14片で、岩壁直下が圧倒的に多く、生活の中心部がそこにあったことは明らかである。

#### ((第4洞穴上層部遺物の型式と編年))

##### 1. 土師器片

胎土に大粒の砂粒を可成り顕著に含んだ。非常に隨い上層器片が総数20片(第13図1~10)中その大部分を占めているが、これらは第2洞穴のそれと同様にロクロ目がほとんど見られない点などから、極く初期の土師器ではなかろうかと考えている。その内で底部らしい複雑な形の破片で昭和38年度の仮掘時とその後に出土したものが合計2片と、器壁とも思えない厚手破片が數片あるが、これらは高杯形土器の台部

と坏部の接合部付近の破片ではないかと感じている。然し38年度の試掘時にはロクロ使用痕ある口唇部破片が1片（第13図3）出土しているので、このことも付記しておく必要があろう。

## 2. 弥生式土器片

1個体分まとめて出土し、完型土器に復原し得た土器（第13図11）が第1区最奥部の第2層最上層部から出土しているが、この上器の器厚は6mm、色調黒褐色で頭部から上が外反し、その部分だけが無文に研かれ、肩折した頭部に一列の荒い刺突の列点文がめぐり、それ以下の胴部は条の乱れがちな斜行縦文となっている。底部が欠損しているが復原の結果高さは27cm、口径20cmの変形土器であった。この土器の型式については色々異説があって長い間それを決定しかねていたが、筆者は斜行縦文に見る粗製の弥生式土器であろうかと考えている。昭和38年度の試掘時に出土したものの内に、口頸部が無文でゆるく外反し、頭部の肩折部に指頂の押圧痕をめぐらし、その下部を斜行縦文にした黒褐色の土器片1片（第13図13）、また第2区から出土したものの内にも頭部から上が無文に研かれて外反し、頭部以下に条も筋も不明瞭で、短い織縫痕ばかりが全面に印されている黒褐色の、厚さ5mmの口頸部土器片が6片程（第13図12）あるが、これらは外反した口頸部の形態や頭部の肩折部に刺突系の文様をめぐらせている点など、前記斜行縦文式の復原土器と同種の弥生式土器であろうと考える。

また第3区から出土した同一個体の破片四片（第13図14）は青灰色で胎土は細かく、砂粒を全然含まず硬焼きで器厚6mm、頭部以上が無文で強く外反し、胴部の斜行縦文地文上に大きな羽状沈線が1本見える。この種青灰色の土器は志賀津式を出す当方彌生式遺跡で時折見かける色調焼成の土器である。

以上はみなAトレントから出土したものであるが、Bトレントから出土したものの中に、流れのような歎らかい斜行縦文の条が反対方向に交差して、大きな羽状縦文をえがく土器片が1片だけがあるが、これはもしかすると弥生式の土器片であるかも知れないが、確実なところは良くわからない。

## 3. 繩文晩期土器片

無文紅褐色の、焼成堅密な土器で、口頸部と台部に肉形的な工字文をもつ同一個体の破片26片（第13図15）が第7区から出土した。復原の結果口径30cm、高さ15cmの大きな台付浅鉢で砂沢式（大洞A'併行）の仲間である。

繩文晩期として明確なものは右の土器だけで、その他はみな晩期か後期か判断に苦しむようなものばかりであった。

明るい黄褐色の砂質粘土を用い、焼成歓弱器厚5mm未満の薄手で、丸底風の同一個体の底部破片3片（第13図16）が第2区から出土しているが、この破片の底面は4ヶ所が瘤状に隆起して接地部を構成している。このように底面接地部に4個の乳頭状突起をもつ土器は、当方繩文晩期の大洞式土器中にも稀に見かけるものであるが、晩期のそれは黒色に近い焼成堅密な土器で、本土器は黄褐色で焼成歓弱、胎土には多量の砂がふくまれているので趣が著しくちがっている。荒れた器面に細かい縦文の痕が幽かに認めら

れるので、縄文後期新地式あたりのものではなかろうかとも考えるが、然しかかる底部の縄文後期土器はまだ見たことがないので、今は取敢えず晩期として扱っておく。その他に黒褐色薄手で厚さ4mm、斜行縄文の地文上に明らかに赤色染料が用いられたものが2片（第13図17）あるが、これらも恐らく晩期のものであろうと思われるが当地方砂沢式（大洞A'併行）の遺跡でもこの種土器片が出るので判然としない。

#### 4. 縄文後期土器片

口唇部破片で色調赤褐色、焼成堅纖で器厚6mm、口唇上面の外角に先端で太く短く、鮮かな刻目を付したものが1片（第14図18）出土しているが、これは福島県の宝ヶ峯式（加曾利BⅡ式併行）かと思われる。

第2区から出土したものに、胎土に砂質粘土を用いた薄手土器片で、色調黄褐色、幅広い隆帯上に比較的長大な瘤を二つ並列した同一個体の破片4片（第14図28～29）と同種土器で別個体の5片（第14図28～29）があるが、これら土器片の隆帯の上面や盛り上った縄文帶の上には、細かな羽状縄文もしくは斜行縄文がこっている。また赤褐色で器厚8mm、大きなカーブを画く磨消縄文帯が瘤を中心として放射状に広がる同一個体の破片が、第2区と第7区から10片（第14図20～22）ばかり出土しているが、この磨消縄文も非常に細かい羽状縄文である。以上の土器片はみな福島県の新地式もしくは金剛寺式、青森県の十腰内5式あたりの仲間で、関東地方の安行Ⅰ・Ⅱ式に併行するものであろう。

また器厚4mmの薄手灰褐色、胎土に多量の砂粒を含んだ土器片が16片程（第14図23～27）出土しているが、これら土器片の口頭部の形態は胴部と頭部の境目で屈折し、頭部以上が直立して口唇上端が特に薄くなっている。焼成は頗る軟弱で器面が荒れてザラザラしており、文様はほとんど識別できないが、中に1片だけ細かな羽状縄文の痕の見えるものがある。これらは比較的小形の壺形土器で恐らく新地式乃至金剛寺式頃の土器ではないかと思われるがよくはわからない。

以上はみなAトレンチの遺物であるがBトレンチから出土したものの内に、斜行縄文地文上に平行沈線を數本引いて帶縄文を形成している破片が1片（第14図19）あるが、これは明らかに加曾利BⅠ式である。

#### 5. 縄文前期土器

縄文前期に属するものはAトレンチからは全然出土していないで、Bトレンチからだけ同一個体の破片6片（第15図30～32）が出土している。厚手粗製の口縁部と胴部および底部破片で、口縁部破片には鋭く盛り上った山形把手があり、そこには割突文の列点が見え、底部は大きな平底である。恐らく縄文前期末大木6式あたりの土器であろう。

#### 6. Aトレンチ上層部の石器

上層部といつても表土と第4層は無遺物層であるから第2層と第3層の石器ということになり、この二

つの遺物包含層から石器類は総計14個出土している。その遺物の内容は縁泥片岩の小形薄手の磨製石斧が1個（第15図41）、砂岩の凹み石が4個（第15図33～36）、磨石2個（第15図37～38）、こぶし大溝形の敲石に似た黒色頁岩の原石が1個（第15図39）、鈍色の頁岩で両端の尖った片面加工の小石器1個（第15図40）、その他はすべて頁岩剝片である。

#### 〔Aトレンチ第5層の縄文早期遺物〕

土器——Aトレンチ第5層（黒土層）中から出土した土器片総数は239片3個体分であるが、その内容を推察して頂くために、昭和39年度に出土した204片についての内訳を示して見ると下記の通りである。

表面の縄文と裏面の条痕が共に鮮明なもの165片。表面縄文裏面条痕のどちらか一方が不鮮明なもの39片で、表裏ともに鮮明な165片は明らかに2種類に区別することができる。表面の縄文がほとんど横走に近い斜行縄文で、裏面の条痕もまた横走しているものが65片、表面の縄文が縱に走り、裏面の条痕が横走しているものが100片である。前者を第4洞穴第5層A類土器、後者を第4洞穴第5層B類土器としてその各々の特色を比較すると下の如くになる。

#### 第5層A類土器（第16図1・2）

器厚6mm、器皿色調は暗茶褐色で、繊維が多量に含まれ燒成は中位。胎土は比較的細かいが器壁内に大粒の小石が含まれ、その脱落痕が土器の表面や割れ目に現いているものなどが數片ある。表面の縄文はすべて刻明で、不鮮明なものもしくは丸々で消えているようなものは僅か7片しかない。口頭部破片が10片あり、その全部は口頭部がゆるく外反し、口唇部約1cm幅だけ縄文が明確に磨り消されている。口唇上面には熱糸が刻目状に押捺されており、胴部縄文はすべて非常に単純な斜行縄文のみである。裏面は黒褐色で太目の条痕文が整然と横走している。

#### 第5層B類土器（第16図3・4）

器厚6mm、表面は明るい紅褐色で、胎土には繊維が含まれておらず、胎土が細かく全然砂粒を含んでいないのが焼成は軟弱である。絶じて表面の縄文が浅く、丸々で消えているもの故意に縄文を磨り消したと思われるものなどが総計100片中50片以上もある。縦走する縄文地文の上に拂りのない太い繊維束を横走波状に押捺した文様風なもの見える破片が2片あったが、これが果して文様であるかどうかは判断しかねる。裏面はA類土器片と全然同じで、色調黒褐色、太目の条痕文が整然と横走している。

右2種の土器片の縄文はことごとく單方向單節で、それ以外の縄文技法が全く見られず、裏面文様はサルボウの貝殻条痕文である。底部破片は両種ともに1片も発見できなかったので、丸底ではないかとも考えている。

以上第4洞穴第5層から出土した土器はA・B両類とともに、東北の傾向の非常に強い縄文早期末のいわゆる縄文条痕文土器であって、東北地方太平洋側の同期諸型式である素山上層式、上川名下層式、根木上

層式などの仲間であることは大体認めて良いことだと思う。

#### 第5層C類土器（第16図5）

第5層の最下層から、一見羽状繩文とも見られる反対方向の粗い斜行繩文を交差させた、器厚8mm赤褐色で焼成の粗雑な土器片（裏面無文黒色）が1片と、文様は全くわからないがこの土器片と胎土焼成色調が同じなので同一個体であろうと思われる乳頭状尖底土器の底部破片が1個（第16図5）出土した。この2片の土器片は前記A類およびB類土器とは全然異質のものであるので、これを第5層C類土器と名付けたが、その全体の器形、文様、型式などは今のところ凡て不明である。

石器——本層位出土の石器類は総計11個でその内訳は、小形薄手で三角形に近い石器が1個（第16図7）、ずんぐりした小形の錐形石器が1個（第16図8）、同形石器の半折したものが1個（第16図6）、つまみ部分にのみ細かい加工が見え、その他の部分が荒い剥離面だけの少々弯曲した錐形石器（長さ6cm）が1個（第16図9）、整形打のみえない不定形の剝片が7片などであるが、礫器以外の石器類はすべて艶のない黒色の頁岩、かつ非常に薄い剝片であることが、この層の石器の特色であるように見える。

この層で特色あるもの一つに斧形の礫石（第17図16～18）がある。全然加工の痕がなく、したがって刃部に当る尖端部の断面も尖らずに丸い。一見まことに平凡な川原石だが、全く同形のものが土器片の最も多出した地点から3個も一緒に出土した。その他棒状礫が3個（第17図19～21）と小児の頭程の丸石に近い砂岩の礫も3個程発見されているが、かかる砂岩の礫石は凝灰岩岩壁の崩岩層中では著しく目立つものである。

#### (( Aトレント第7層の繩文早期遺物 ))

土器——第7層からは土器片が181片発見された。然し個体数でいうと僅か2個体分で、その各々の個体について特色を挙げると下の通りである。

#### 第7層A類土器（第17図22・23）

この個体に所属する破片は110片、硬焼きで色調は表裏ともに黒褐色、地文は刻明だが不規則に交差する斜行繩文で口唇上面に刻目、口頸部4ヶ所には幅広い刺突文を引すりながら縦に2列に押印した装飾文があり、内面には底部まで繩文が印せられていた。器形は復原の結果円錐形に近い扁平形の尖底土器で、口径15cm、高さ20cm、器厚5mmであった。

#### 第7層B類土器（第18図24～27）

この個体に属する破片は71片。器皿は黄褐色で焼成は軟弱、口頸部にはサルボウなどの背頭を用いた細い条痕文が横走し、その上に然糸の側面圧痕文を1本ずつ間隔をおいて斜行させており、胴部は全面反対方向の繩文を不規則に交差させた斜行繩文である。器内面は暗褐色で前記貝殻の背頭部を用いた細い複線の連続孤状文がえがかれており、底部近くではこの孤状条痕文に繩文のまじっているのが明らかに認めら

れる。底部の形態は最尖端部の破片が見当らないので、確実なことは言えないが最下端部の器厚が胴部とほとんど同程度に薄いので乳頭状ではなさそうであるし、またA類土器よりも下胴部の器壁の上方への開きが強いので、胴部が大体三角形に近い砲弾形尖底土器であるように感じられた。復原の結果口径30cm、高さ35cm、器厚5mmで、第5層のA類およびB類土器とはほぼ同程度の大きさであろうと思われるが、第7層A類土器にくらべると遙かに大形のようである。

以上の早期土器の文化系統について考えると、早期第1生活面（第5層）の土器も第2生活面（第7層）の土器も、ともに貝殻の条痕文を伴う点では北海道の住吉町式、関東の三戸式、田戸式、茅山式などの田戸住吉町系土器群に属するものといえるが、縄文が非常に多い点はむしろ東北的特色を示すもので、直接的には根本上層式、素山上層式もしくは上川名下層式などのいわゆる縄文条痕文土器群の仲間であるというべきであろう。表裏両面に縄文あるものは直接的には青森県の赤御堂、長七谷地などの赤御堂式土器の仲間である。

石器——第7層の黒土層中からは、土器片は勿論のこと木炭や焼け石が多量に出土しているし、炭化したクルミの果実も3片（第18図28～30）出土しているのに、石器の類が全然見当らなかったのはどういう訳であろうか。

#### (( A トレンチ第9層の縄文早期遺物 ))

土器——第9層は昭和41年度に旧トレンチの第1～4区を、昭和43年度に隣接する拡張トレンチの第5～8区を発掘し、土器片総計775片を得た、新旧トレンチの遺物の性格は同じであるから、昭和41年度に発掘した108片に関する統計調査資料第6～8表をお目にかけて、第4洞穴第9層土器全体の性格を察知していただくことにしたい。

第6～8表から伺える全体の様相は先ず第一に、器厚が5～7mmのものがほとんど全部で、10mmを越えるような厚手土器片が全くないにも関わらず4mm以下のものが比較的多いこと、つまり第9層土器は可成り薄手の土器に属するようで、貝殻文様の種類の豊富さなどから見ても意外に精巧な土器文化であったことが伺えるのである。

色調は色別にいうと黄褐色のものが最も多く、灰褐色がこれに次ぎ、赤褐色と茶褐色が第3～4位となっているが、明暗の度合いを総体的に見ると黄褐色などの明るいものは半分以下で、むしろ暗い色合いのものが多いようである。焼成は108片中80片が堅微の部に入るから、全体としては非常に良好であるといえよう。

次回中では器形はわからぬが、完型に復原し得たものが1個（第19図24）だけある。それは平縁で口径20cm、高さ25cm、底端が軽微な乳頭状を呈するやや胴長の尖底土器であった。その他にも底部のみの破片が3片（第20図13, 47, 48）あるが、いずれも軽微な乳頭形を呈しているので、この種尖底土器が一般

(第6表)

第9層土器片の器厚文様別数量

文 器 厚 様	貝 殻 縁 刺 痕 文	貝 殻 縁 刺 痕 文	擦 痕	單 線	平 行	波 状	連 続	竹 管 線	窩 文	無 文	不 明	計
4 mm 未満												
4 mm			1	2						1	2	6
5 mm	5	2	1	4	1	4	1	2	1	1	9	42
6 mm	1	2	2		2	2				4	17	43
7 mm	1				1				5	5		12
8 mm									2			2
9 mm									1	1		2
不 明										1	1	1
計	7	4	4	6	3	7	2	1	10	35	26	108

(佐々木茂 調査)

第9層土器片の色調胎土焼成別数量

(第7表)

色 調	胎 土		燒 成	
	粘 土	砂 質 土	堅	軟 弱
黒褐色	3	1	1	2
暗褐色	2	1	2	0
茶褐色	11	5	11	5
赤褐色	11	9	15	10
黃褐色	32	11	31	10
灰褐色	21	1	20	1
計	80	28	80	28

(佐々木茂 調査)

第9層土器内面文様別破片数

(第8表)

文 樣	全 面	口 錄 部	計
刻 目		2	2
貝殻縁刺痕文		2	2
貝殻条痕文	5		5
擦 痕	5		5
無 文	94		94
計	104	4	108

(佐々木茂 調査)

的であったように思われるが、中に非常に変った底部のもの（第19図13）が1個ある。これは高さが恐らく10cm程度であろうと思われる程極端な小形土器で、底部が一升瓶をさかさまにしたように太い棒状を呈している。この棒状底部の内容は充実していて、最下端部は切り取ったようで尖っていない。したがってこれを平底土器と見る人もあるかも知れないが、この層の土器の底部の一般的な状態が乳頭形尖底であるとすると、この種土器だけを平底土器と見るのはむしろ不自然で、下端の突起が異常に大きくなつた乳頭形尖底土器の一つの極端な変形と見る方が自然な解釈ではあるまいか。

口縁部の形は大部分は平縁であるが、中に比較的大きな波状を呈するものが3片、小さな波状のものが6片ある（第20図21～30）。前者の内の2片にはその波状口縁の波頂部に縦長の小突起を付しているものがある。

文様についていいうと、本層土器の最大の特色は繩文もしくは撚糸文ある土器片が1片も出土せず、貝殻文がほとんど凡ての土器片に使用されていることであるが、その貝殻文はサルボウなどの条肋ある貝殻を用い、施文方法には左の4種がある。

貝殻条痕文——貝殻腹背の条肋を器面に押しつけて引きずったもの。

貝殻腹縁圧痕文——貝殻の背面を傾けて、その腹縁部だけを器面に押しつけ、条肋の並列する短線を押捺するもの。

貝殻腹縁列点文——貝殻腹縁の条肋の隆起面だけを軽く押しつけて、浅い列点文としたもの。

貝殻腹縁刺痕文——貝殻腹縁を器面に直角に突き刺して、小波状文をえがかせるもの。

上の4種の貝殻文をほとんど凡ての土器片に使用しているのが本層土器の特色であるが、然しこのことは貝殻文様が土器文様の主体をなしているということを意味するものではない。前掲表に見ると、文様要素中には貝殻文以外に沈線文系、隆起線文系、刺突文系などがたくさんあるが、むしろそれらの文様の方が主体的なものとなって貝殻文はそれらの文様を装飾するための付帯的従属的文様となっているのが本遺跡の場合は普通であって、それがまた本遺跡の貝殻文化の一つの特色であるともいえるのである。

次に第9層土器の各種文様構成を示してみたいが、いまでもなく第9層の黒土層はトレンチの外部にまで食み出しているし、地下埋没洞穴の内部などはほとんどまだ全然調査していない有様である。したがって調査の現段階ですべての文様構成を示すことは勿論不可能であるが、将来追加や訂正が当然あることを覚悟の上で、一応のまとめをつけておきたい。

A類文様（第19図1～6）——上下両側を平行沈線で挟んだ浮文的な隆起線が口縁部をめぐり、その下部に斜行する平行沈線などが見える破片が2個体分7片あるが、それらの斜行沈線の内部や浮文的な隆起線の上には、貝殻腹縁の列点文が加えられている。1個体は器厚7mm、色調紅褐色、胎土は非常に細かく、焼成は比較的堅緻である。他の1個体は器厚6mm、色調淡黄褐色、胎土には粗い砂粒がふくまれて剥がれ易いが、焼成は堅緻である。

B類文様（第19図7～16）——半截竹管による直線または曲線の平行沈線を組み合わせて頸部文様帶をつくり、その平行沈線の内部や間辺を貝殻腹縁圧痕文で飾り、かつ平行沈線の交差する辺りに高文を配した破片が4個体分13片程（第19図7～16）ある。この種土器片の2個体分は色調黄褐色で胎土には砂粒がふくまれ、器厚7mmで焼成中位であるが、他の2個体分は色調褐色、器厚7mm、胎土に砂粒がなく、焼成すこぶる堅緻。

また既述した一升瓶をさかさまにしたような底部をもつ、異形かつ極小の乳頭形尖底土器の底部破片

(第19図13~15)には下胴部までB類文様が見える。同一個体の胴部破片2片にも同じ文様が見える。器厚3mmの極薄手黒褐色で、胎土には多量の細砂がふくまれ、焼成はすこぶる脆弱である。

C類文様(第19図17~19)——太いが浅く流れがちな貝殻の横走条痕文上に、比較的間隔ある平行沈線が異方向に走って、胴部一面に幾可判的文様を広げる同一個体の破片が13片。器厚6mm、胎土に多くの粗い砂粒が含まれているが、焼成は良好、色調は赤褐色であった。

D類文様(第19図20・21)——口唇下に丸い4個の竹管文が見え、その下に半截竹管の平行沈線が三対横方向に広がっている破片が1片(第19図20)あるが、これには貝殻文が全然見えない。色調灰褐色、胎土は細かく、器壁の厚さは5mm。また小さい山形口縁の口頭部破片(第19図21)で口唇下に斜行する反対方向の平行沈線を△形にえがいたもの1片も、全然貝殻文を欠いた半截竹管の平行沈線文土器片である。色調黄褐色、胎土に多くの砂粒を含み、焼成はすこぶる軟弱、器厚4mm。

E類文様(第20図49)——口縁部1cm幅が表面剥離してよくわからぬが、細い刺突の点文で埋められているかの如くにも見える。その直下に浅い平行沈線の連続山形文があり、胴部には貝殻腹縁の小波状刺痕がやや間隔をおいて、一見然系文の如くに斜行している破片が1片ある。色調褐色、胎土に細かい砂粒を含み、焼成中位で器厚5mmである。

F類文様(第19図22・23)——口唇直下に篦書きで、太く不規則な小波状文を2本めぐらせ、その下部に斜行する平行沈線の一部や窓文の見える2個体分5片の破片がある。その1個体分1片は器厚7mm、色調淡紅褐色、胎土は細かく焼成は比較的堅硬である。別個体4片では大きな波状を呈する口縁部にそって、2本の太く不規則な同種小波状文がめぐり、頸部以下には窓文を接点として交差する異方向の平行沈線が見える。器厚7mm、色調褐色、砂質粘土で焼成中位の土器片である。

G類文様(第19図24)——この種文様の土器片は1個体分まとめて出土し、復原に成功した唯一の貝殻文土器である。口唇上面が刻目による小波状を呈し斜に並列する貝殻腹縁文の帶状文を口唇部から中胴部まで8段程重ね、その下部を無文にした軽微な乳頭状の尖底土器である。口径20cm、高さ25cm、器厚5mm、色調黄褐色の非常に精巧な仕上りの土器であるが、焼成はすこぶる脆弱である。

H類文様(第20図25~41)——非常に大柄な山形連続文を何重かに重ね、その山形の頂上部と谷間部に窓文を配し、重ねた山形連続文のはば平行する沈線の間には貝殻の復縁压痕文、または点列文を配した破片が約6個体分20片程(第20図25~30)あるが、この種文様の土器片中には複線の連続山形文と同時に、単線の山形文もしくは波状文を併用するものも6片程(第20図31~35)ある。またこの種文様中の直線沈線のあるものには、その沈線の上から重ねるように貝殻腹縁の刺痕文を押印して、その沈線を縦取っているものが4片程(第20図36~41)ある。器厚6mm、色調褐色または暗褐色で焼成は堅硬である。

I類文様(第20図42~45)——額のある棒状器具(半截竹管の如きものか)の一端で描いた幅のある直線もしくは曲線沈線の破片が5片ある。器厚6mm、色調暗褐色で焼成は堅硬である。

丁類文様（第20図46）——貝殻腹縫の圧痕文を土器面全面に施して地文となし、その上に縦の紐状沈線を軽く外反した口縫部から下方に流下させている破片が1片ある。器厚6mm、色調黄褐色、胎土に砂粒をふくみ焼成は中位である。

以上の第9層土器片中には、櫛文もしくは然糸文ある土器片は1片も出土していないが、このように縦文系文様を全く伴わない貝殻文のみの土器文化は、関東には三戸式、東北地方では岩手県の小船渡平式などがあるが、秋田県にもそのような特色をもつ文化段階があった管で、それが岩井堂文化であったかも知れないという仮説の上に立って、以下第9層土器の型式と編年を考えてみたいと思う。

地文の条痕文上に異方向の平行沈線を引いて、幅広の幾可学的文様帶を構成するモチーフ（C類文様）は青森県のムシリB1式に見られる文様のあるものに類似し、沈線を貝殻腹縫の小波状刺痕で継取るモチーフ（H類文様）や、平行沈線の中間に貝殻腹縫の浅い点列を加える手法（A類およびH類文様）などは同県の物見台式、岩手県の蛇王洞Ⅳ層土器などに、あるいはまた貝殻の腹縫を傾けて押印する貝殻腹縫圧痕文（B類文様）を沈線とともに盛んに使用している点は蛇王洞洞穴第Ⅳ層土器、宮城県の大寺遺跡最下層土器などに、また貝殻の腹縫を直角に刺突した貝殻腹縫刺痕文（E類文様）ある土器片は青森県の吹切沢式などと浅からぬ関係が認められるのであるが、然し吹切沢やムシリB1式に伴う絡糸帶圧痕文その他の縦文系文様は、岩井堂第4洞穴第9層からは全く出土していない。またムシリB1式に見る高目文風な幾可学的条痕文も見当らないし、吹切沢式特有の貝殻腹縫刺痕の鋸歯状文もない。したがって本遺跡出土土器の型式は青森県の物見台式や宮城県の大寺最下層式、蛇王洞第Ⅳ～Ⅴ層土器あたりに最も近いものではないかと思われる。

石器——第9層の石器類総数は82個で、その内訳は石槍の折れたもの1個（第20図50）、つまみある縦形石匙が3個（第20図51～53）、2次的な整形打のほとんどない、縦に縞の通った石匙類似石器が3個（第20図54～56）、無柄石鎌が5個（第20図57～61）、板状剝片の相対する2面に段階状剝離を施した振器が1個（第21図65）、石箒3個（第20図62・63、第21図64）、長さ3cm以上の不定形剝片10片、小剝片56片。

石鎌5個のうち2個は尾縫の片方がその根元近くから折り取られた片足石鎌で、形は長三角形。基部の抉り込みは4個が深く1個は浅い。そして浅い方の石鎌の側辺は基部でつぼんでいる。石匙類似石器のうち2個はブレードもしくはナイフブレードを思わせる縦長で、両側片に鋭い刃部をもっている。

長さ3cm以上の不定形剝片10片の内には、比較的大形の厚手剝片の尖った部分を一層尖らせるために、その両側辺から大きな剝離を加えて断面三角形の細長い部分をつくり、その先端に更に細かい加工を加えて錐状に尖らせたものが1個（第21図66）ある。

小剝片が非常に多いのは昭和43年度には掘り起した土を全部水洗したので、石鎌石槍石匙などの製作に伴う石削が多量に発見されたためである。

その他に敲き石が 1 個（第21図68）と椭円形の河原石を縦割りして、その一端を粗雑に尖らせた礫器が 1 個（第21図67）、楔形扁平石の底辺だけを研磨した片刃の局部磨製石斧が 1 個（第21図69）がある。

なお昭和43年度の水こし作業では炭化したクルミの殻（第21図70）が驚く程多量に発見されたが、このことは当時植物性食料として如何に多くのクルミが摂取されたかを示す事実である。

#### (( A トレンチ第11層の洞文早期遺物 ))

**土器**——第11層出土の土器片は総計 135 片で、内 6 個体分 35 片は押型文土器片、2 個体分 2 片は貝殻文土器片、1 個体分 1 片は沈線と刺突文の土器片、他の 2 個体分 2 片は纏文ある土器片で、残り 95 片は全然無文の小破片である。

A 類押型文土器片（第21図 1～11）——長さ 10mm 程の棒状工具の表面に、山の高さが棒状工具の長さ一杯になるような複線のハの字形連続文を陰刻し、それを土器面に回転押捺した押型文土器片で、2 個体分 12 片程が発見された。器厚 7 mm、色調黄褐色で、胎土に細砂を含み、焼成軟弱。

B 類押型文土器片（第21図12）——長さ 2 cm 程の陰刻しない細い棒状工具を、横方向に押圧しながら回転し、その押型文帯を上下に接続させて数段密施したと思われる土器片が 1 片。色調褐色、胎土に細砂をふくんでいるが焼成比較的良好、量厚 7 mm。

C 類押型文土器片（第21図17～20）——同一個体の破片 10 片と別個体の破片が 1 片ある。前者は口唇部外角が削られて、その部分とせばめられた口唇上面とが光沢ある平滑面をなし、その直下に長さ 10mm 程の角張った割箸状工具の稜角を強く器面に押圧しつつ横に回転させた押型文帯と、その下端を画する太い平行沈線文とが交互に 2 段程重ねられ、以下を継に撫でおろした擦痕だけにした黒色の土器片である。器厚 7 mm、焼成は硬いが非常に脆く壊れやすい。他の 1 片は同種文様の口縁部破片で、平行沈線にはさまれた横走の押型文帯が見られるものである。器厚 7 mm、色調黄褐色、焼成可良、胎土には砂粒がふくまれている。

D 類押型文土器片（第21図13）——この種土器片は 1 片だけしか発見されていない。長さ 5 cm 程もある長い角張った割箸状工具の側面を、1 本ずつ斜め平行に數本押捺し、これと同様の方法で施文した反対方向の平行沈線を連続させて、A 類押型文と同様な複線ハの字形の、しかも 5 倍程も大柄な文様を作出したものである。色調黒褐色、器厚 7 mm、胎土には粗い砂粒が含まれているが、焼成は誠に良好で非常に堅い。

E 類押型文土器片（第21図14～16）——この種破片 1 個体分 2 片は、陰刻した棒状工具を回転押圧している点 A 類押型文に似ているが、その陰刻文が A 類の如くハの字形をなしていないで、平行線が縱に並列しているだけである。したがってこの工具による施文の結果は B 類押型文と非常によく似たものとなる訳だが、然しそれでいて上下の帯状文の接続点の様子は B 類のそれとは明らかにちがう。どう違うかと問わ

れると今のところ明確に説明はできないが、B類のそれのように上段の帶状文の上に下段の帶状文が、少し重くなっているというような状態が全く見られない。これは縦線を陰刻した棒をころがした場合と、全く陰刻しない棒だけをころがした場合の相違ではあるまいかとも考えて見るが、確實なところはまだ何とも言えない。器厚7mm、色調黄褐色、胎土に砂粒をふくまず、焼成歯弱。

貝殻文土器片と沈線刺突文土器片（第21図21～23）——この種土器片は4片あって、貝殻腹縫刺痕文を、間隔をおいて短く、縦に並べた茶褐色器厚5mmの土器片が1片ある。他の1片の貝殻文土器片は1cm幅の数本の平行沈線の間を、同一方向に斜行する貝殻腹縫刺痕文で埋めたもの（第21図21）で、色調黄褐色、器厚8mm、胎土に細砂を含み、焼成中位。もう1片の貝殻文土器片は深い弧線や直線に画された部分を、丁度磨消痕文のように、貝殻腹縫刺痕文で埋めたもの（第21図23）で、色調赤褐色、器厚8mm、胎土は細かく焼成良好である。この破片と色調焼成胎土器厚がすべて同じなので同一個体ではないかと思われるが、沈線と刺突文だけの破片が1片（第21図22）ある。この破片には気のせいか割れ目の辺縁に、貝殻腹縫刺痕文らしいもの一部が僅かに見えるような気もする。

右のうち口縁部裏面に縦の貝殻腹縫刺痕文を並べた破片は、第9層から出土したものと全く同一の色調、胎土、文様の土器片であるから、上層の土器片が脱入したものと見るべきであるが、沈線で画した部分を磨消縫文風に貝殻腹縫刺痕文で埋めたものと、数本の平行沈線の間を斜行する貝殻腹縫刺痕文で埋めたものとは、出土状態から見ても明らかに第11層の遺物と思われる。

縫文土器片（第21図24・25）——縫文ある土器片は2個体分2片出土しているが、その1個体分1片（第21図24）は淡紅褐色で器厚5mm、条の走向方向はわからないが単節の比較的細い縫文である。別個体の1片（第21図25）は横長い節が上下縫間に重なった縫文で器厚6mm、色調淡褐色、焼成は中位である。

掠てA類押型文は北海道の温根沼もしくは青森県の日計型押型文で、B類押型文は新潟県小瀬ヶ沢洞穴出土のいわゆる簾状押型文、C類押型文は同じく小瀬ヶ沢から出土していて、これが押型文であることは芹沢長介先生が指摘していられる。D類押型文は本遺跡以外に全然類例のないものである。E類押型文は今のところ施文方法、出土地、型式名称などすべてが不明な押型文である。

石器——第11層の石器類は総計173個。その内容は、美麗な押圧剝離で基部の抉り込みの深い片足石器が1個（第22図26）。同様に美しい押圧剝離ある細い縫の折れた尖端部が1個（第22図27）。断面三角形の厚みある継長剝片の尖端部だけに細かく加工して、錐状に尖らせたものが2個（第22図28～29）。径6cm前後の薄手剝片で、直線をなす一辺もしくは二辺に細かい整形打の見える搔器が2片（第22図30～31）。比較的大形の剝片が5片。小形不定形の剝片が162片（第22図39）。

以上の剝片石器の石質はすべて頁岩であるが、その他に砂岩の凹石2個と礫器3個（第22図34～38）がある。礫器は円錐に近い河原石の表面両面を縦割りして剥ぎとり、残った中央部の平板な部分の一端に

粗い加工を加えて、石斧形の礫器としたものが1個（第22図34）、平たい河原石を縦割りもしくは斜め割りして、石斧形もしくは尖頭形の部分のみを残し、その先端に粗い加工を加えて粗雑な刃部としたものが2個（第22図35・36）がある。

以上のうち小形不定形の剣片が物凄く多いのは、第9層と同様掘り起した土を全部水蒸しした結果である。然しその石削が第9層よりも遙かに多い割に、石器や鱗などの出土が少ないのでどういう訳であろうか。

またこの水蒸しでタルミの炭化した穀がおびただしく出土（第22図40）したことと第9層の場合と同じで、両層の出土量から見ると当時食料中でタルミが如何に重要な位置を占めていたかを再検討して見る必要さえ感じる程である。

### III. 結 言

岩井堂岩陰遺跡の発掘調査は言うまでもなくまだ完了した訳ではないが、昭和38年以來の6ヶ年間の調査結果を一応総括すると次のようである。

土師時代（古墳時代、奈良平安時代）には第1・2・4洞穴の内部が主に使用されて、外部からほんと破片が出ていないし、遺物の出土量も案外に少ないようである。したがってその利用の仕方は恐らく祭神その他同類の用途にのみ限られていたものかと思われる。当方の土師器の編年はまだ余り明確とは言えないが、岩井堂岩陰出土の土師器には、器壁に粗い砂粒を含む古い型式（但しそれが和泉式、鬼高式のいずれに属するかは全く不明）のものとロクロ使用痕ある新しいもの（真間、国分式）の双方があるので、土師時代後期になつても洞穴内部が、同様の目的で利用されたと考えるべきであろう。

ところが第3洞穴の場合は、もと大岩庇が長く突出していた関係であるかも知れないが、現洞口部より遙か前方から土師時代も後期（真間国分式）に属する煮炊き用の組製土器が、比較的多数出土しているので洞穴の外方部で生活が営まれたことも、後期にはあったと考えるべきであろう。

弥生期の生活址と思われる場所は、昭和39年度までは第2洞穴の内部だけで、その時期は大体弥生期の半ば頃（楕円型式もしくは志藤沢式）と考えていた。然し昭和40年に至って、第4洞穴第1区の最上層から出土した復原完型土器も弥生期中期（楕円型式）のものであることが判明したし、昭和41年度には第3洞穴の前方部で今度は弥生期後期（桜井式）の復原完型土器が発見された。したがって岩井堂の岩陰では弥生期の中期と後期の二時期にわたって、第2洞穴と第4洞穴と第3洞穴の内外で生活が行われたと考えて良さそうである。この弥生期においても洞穴が祭祀的用途に用いられたか否かはむずかしい問題だが、第2洞穴や第4洞穴の内部からは同時期に屬し、しかも種類の異なる幾つかの土器が出土しているので、筆者としてはむしろ生活の場であったと考えたい気がする。

第3洞穴前方部から縄文晩期初頭（安行Ⅱa式）の土器や、縄文晩期中葉の急須型注口土器（大洞C1式）などが出土しているし、第2洞穴内部からは縄文晩期最末期の砂沢式（大洞A'式併行）の破片が可成り多数出土している。また第4洞穴の前方部からは砂沢式の完型に復原し得た台付浅鉢が出土している。したがって縄文晩期には第3洞穴前では初期と中期に、第2洞穴内部と第4洞穴の前方部では晩期の最末期に人が住んでいたことになる。

縄文後期には第2洞穴の内部から縄文後期中葉の加曾利B1・2式が、第4洞穴の内外からは縄文後期後半の新地式もしくは金剛寺式が、第3洞穴前方部からは縄文後期前半の堀之内1式と、中葉の加曾利B1式後半の新地式もしくは金剛寺式などが多く出土しているので、この時期にも岩井堂岩陰の各所で生活が行われたことになるが、中でも特に第3洞穴の前方部は縄文後期生活の中心地であったようである。

縄文中期の遺物は岩井堂岩陰の何処からも発見されていない。また縄文前期のものは第2洞穴の内部では非常に豊富であったから、そこで生活が行われたことは確実であるがその他の洞穴では第4洞穴Bトレンドで僅か6片出土ただけである。したがって第1・4・3洞穴の内外には縄文中前期の生活の痕跡はほとんどなかったと考えるべきであろう。然しこれはむしろ不可解な現象で、本遺跡を含む雄勝町の上院内地区には尚時期の大遺跡が反対に非常に多いのである。したがって第2洞穴以外の岩井堂岩陰には当時何か人の住みにくい特殊事情が起っていたと考えるより他ないのであるが、丁度この時期に該当する地層が第4洞穴第4層の異常に厚い無造物崩岩層である。それは岩底や岩壁の崩壊が、この時期に如何に激しかったかを示すと同時に、岩井堂岩陰の全般的な生活環境上にも非常に大きな変化のあった時期であることを暗示するものではあるまい。

縄文早期に人が住んだのは第2洞穴の内部と第4洞穴の前面だけで、第1および第3洞穴の前方部は深層未調査のため、今のところ不明というより他ない。第2洞穴内部では縄文早期最末期（春日町式）から早期後半（赤御堂式）まで、第4洞穴では第2洞穴より更に古い縄文早期中葉の貝袋文化期（物見台式）を経て縄文草創期のある時期に属する東北北海道的押型文文化期まで人が住んでいたことが確認された。

最後に第4洞穴の縄文早期文化について二・三所見を述べて見たい。

第5層のA類土器およびB類土器は、広義には東北地方の縄文条痕文土器群、例えば上川名下層式または模木上層式、素山上層式などの件間であることは既に述べた通りであるが、然し厳密にいうと本遺跡第5層の土器文化は单方向の斜行縄文のみの誠に単純至極な土器文化であって、他の縄文条痕文土器文化がもっているような縄文以外の各種装飾文を一切もっていないという、誠に目立った特色を示す文化である。この文化と同様の土器文化をもつ遺跡は現在のところ非常に少く、寡聞の筆者は青森県下北郡ノッコロ遺跡と同県北津軽郡深郷田遺跡だけしか知らない。

思うに縄文条痕文土器を出土する多くの遺跡は、遺物の上から見ると多分に複合遺跡の傾向が伺えるよ

うで、例えば前記の上川貝塚、根木貝塚、素山貝塚などはみな、それ自身の内に岩井堂第4洞穴第5層土器の如き単純至極な縄文条痕文化期を、混然と内包しているのであるまい。

本遺跡の第5層と第7層の黒色の文化層の間には僅か10~20cmの薄層ではあるが、明瞭な黄褐色の無遺物崩岩層が介在していることは既に述べたが、この無遺物層を境とする上下二つの土器文化の間には明らかに異った様相が認められるのである。今その両者を比較して見ると、第5層土器には地文の縄文以外に装飾文が全くないが、第7層のA類土器には口頭部をめぐる4ヶ所に二列の押引き刺突文があり、B類土器には口頭部に沿糸を斜めに押捺した装飾文がある。また第5層土器の内面文様はA・B類ともに太い横走の、整然とした条痕文であったのに、第7層B類土器の内面条痕は刻明ではあるがその線が遠かに細く、かつ連続的に描かれた弧状の条痕文である。

また第7層土器の胴部器面の地文はA・B両種ともに条が異方向で、かつ不規則な斜行縄文であるが、第5層のそれは雖もしくは横の一方ののみの、しかも整然と条の通った縄文であった。

また第7層A類土器の如き内面文様が縄文の土器は第5層では全く見ることができなかつたし、第5層からは第7層土器の如き砲弾形の尖底土器底部破片は全く発見されていない。

以上によって、第5層土器と第7層土器の異質性は明白であるが、反対に一見異質の土器の如くに見える第7層A類土器とB類土器との間には、意外に多くの共通点が隠されているのである。

口頭部に装飾文がある点、地文の縄文が異方向不規則な縄文である点、器形が砲弾形の尖底土器である点などは既に挙げた共通点である。その他B類土器内面の弧状条痕文の最下端部、すなわち内面底部の文様にはA類土器の内面文様と同様の縄文が判然と押捺されている。このことは前記数々の共通点とともに、一見異質文化の如くに見える内面縄文文化と内面条痕文化とが同期的もしくは共存的文化であることを示すと共に、第5層A・B類土器文化とは厳密にいえば決して同期的共存的文化でないことを示すものとも言えるのである。第5層土器の如き単純化された縄文条痕文土器文化と、第7層土器の如き複雑性のある縄文条痕文文化との間には明らかに時差があり、両者は当然区別るべき文化で、少くとも青森県から秋田県にかけての東北地方日本海側においては、第5層土器のような単純化された縄文条痕文土器文化が成る期間独立した一つの文化期として成立していたということは、ノツコロ遺跡、深郷田遺跡、本遺跡第5層などの実例を以てしても推定できるのであるまい。

次に第9層の貝殻文土器文化層からは押型文は1片も出土しなかった。第10層は1m近い無遺物の崩岩層で、その下から押型文を特色とする第11層が出現してきたのである。このことは明らかに押型文文化は貝殻文文化よりも古いことを示すものであるが、然し第11層から極く少数の貝殻文土器が出土したということは何を意味するのであろうか。恐らくこれは押型文文化は貝殻文文化の最盛期（第9層の時期）よりは明らかに古いことを示すと同時に、貝殻文文化の初期段階とは多少併行関係があるということをも示すものではあるまい。

次にまた第9層からは縄文系土器片は1片も出土していない。然るに第11層からは縄文ある土器片が2片出土している。このことは押型文土器文化は貝殻文以前の縄文系文化とも幾分併行関係があるということを意味するものであるが、その時期はまた貝殻文文化の初期段階でもある、ということにもなる。第11層中の極く少數の貝殻文土器片が万一第9層遺物の混入であったとしても、押型文文化と縄文系文化との相関関係に変化はない。何故なら第9層中に縄文ある土器は1片もなかったのであるから、縄文系土器片が他から混入するということはあり得ないからである。

関東の押型文土器は、いわゆる縄文草創期の撫糸文土器文化の終り頃、大体稻荷台式の時代から出現しはじめる。勿論関東系押型文と北海道東北系押型文すなわち温根沼系もしくは日計型押型文とは同一のものではない。したがって北海道東北系押型文については、関東のそれとは別個に考えて見る必要も生れてくる筈である。

岩手県の蛇王洞洞穴ではその第Ⅳ～Ⅴ層の貝殻文文化層（吹切沢式、物見台式）の下部（第6層）から撫糸文や縄文を併せもつ蛇王洞Ⅱ式土器が出現し、そのもう一つ下層（第7層）から温根沼もしくは日計型押型文が出土している。そしてその押型文土器を出土した第7層からは、同時に縄文や三糸文ある土器片も併出している。日計遺跡に於ても本遺跡第11層に於てもこの状態は同じであるから、蛇王洞第Ⅳ層の遺物の出土状態は決して異例ではない。

果してそうだとすると日計型押型文の出現期は必ずしも縄文系文化の最末期というわけではなく、縄文系様が完全に姿を消す貝殻文文化期もしくはその最盛期と日計型押型文の出現期との間には蛇王洞Ⅱ式のごとく撫糸や縄文を伴う文化段階が幾つかあり得るということを想定してもあながち理論の飛躍とは考えられないものである。

B類押型文は新潟県小瀬ヶ沢洞穴からも出土しているが、小瀬ヶ沢のB類押型文は棒状工具の側面を押し付けながら回転した押型文帶の上に3本の撫糸を横方向に押捺している。そしてこの結果が糸でつないだ簾に似ているので、簾状文とも呼ぶのである。本遺跡第11層のB類押型文上にはこのような撫糸文はない。それではこの撫糸文を伴う小瀬ヶ沢的簾状押型文と、それを伴わない岩井堂の押型文とはどちらが古いか或はまた新しいかということになる。残念ながら今のところはまだこの疑問に対して明解な解答を与えることはできないが、双方ともに撫糸文もしくは縄文ある土器片を伴っているのであるから、縄文系文様との併存的共存的関係には変りがない筈である。

またC類押型文でも小瀬ヶ沢の場合は、押型文帶を挟む上下の平行沈線が撫糸の押捺文となっている。したがってこの種押型文の場合でも、押型文帶をはさむ上下の線が平行沈線のものと撫糸文のものとではどちらが古いか、或はまた新しいかという問題が起るが、同じ問題はまたA類押型文の場合にもある。蛇王堂の押型文上には横に数本の平行な沈線が加えられていたが、日計や岩井堂の押型文にはそれがない。これらの問題点と取組むことは北方系押型文研究上の急務であろうと思われるが、今はこれを後日の課題

として残すより他ない。

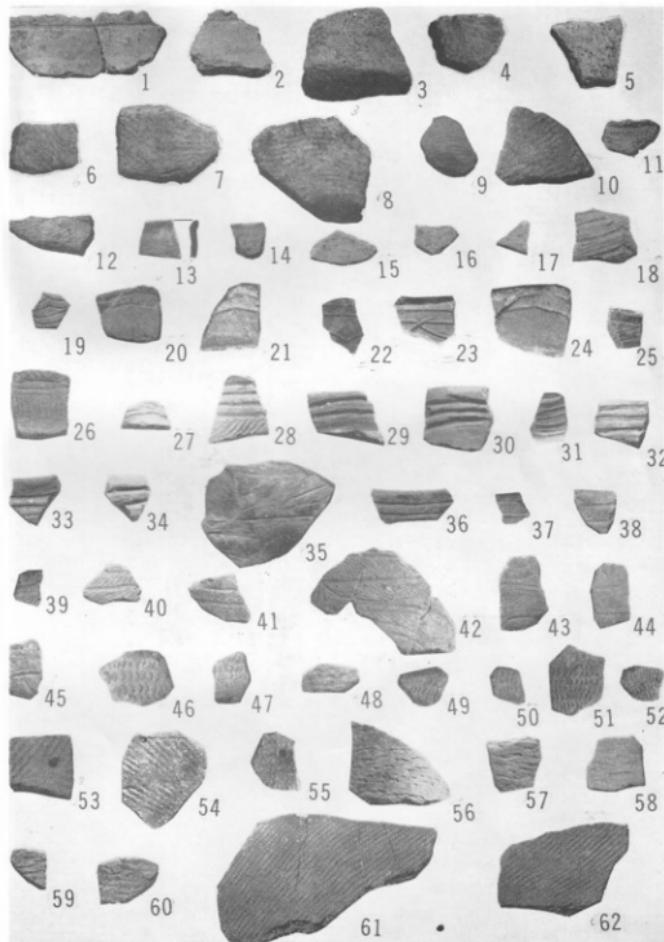
ところで小瀬ヶ沢洞穴はB類とC類の押型文をもっているにも関わらず、日計型押型文（A類）を全然出土していない。のみならずそのB類やC類押型文を出土した層よりも更に上層から関東系押型文（山形連続文と格子目文）を出土しているのである。この小瀬ヶ沢におけるB類およびC類押型文と関東系押型文との層位関係は、B類およびC類押型文が関東系押型文より古いことを示すものであるが、A類押型文だけが新潟県に伝わらなかったのはどういう訳であろうか。理由はともあれ、A類押型文に関する限り、秋田新潟間に文化的交流が途絶えていたことは事実である。

ところが最近興野義一氏は青森県から岩手、宮城、福島を経て、茨城県に至る、東北地方と北関東の各地から、A類押型文が可成り多數発見されてきたことを報告していられるが、これは福根沼もしくは日計型押型文が北方から次第に関東へ伝って行く経路を示すものではあるまい。そしてまた関東に伝った北海道東北系押型文の未熟な複線への字形の印刻技術がそこで完成し、整然とした各種関東系印刻文となつて、それがまた小瀬ヶ沢を含む中部地方から西日本全域に伝播して、縄文早期後半の押型文全盛時代を現出するに至った、という風に考えることができないであろうか。

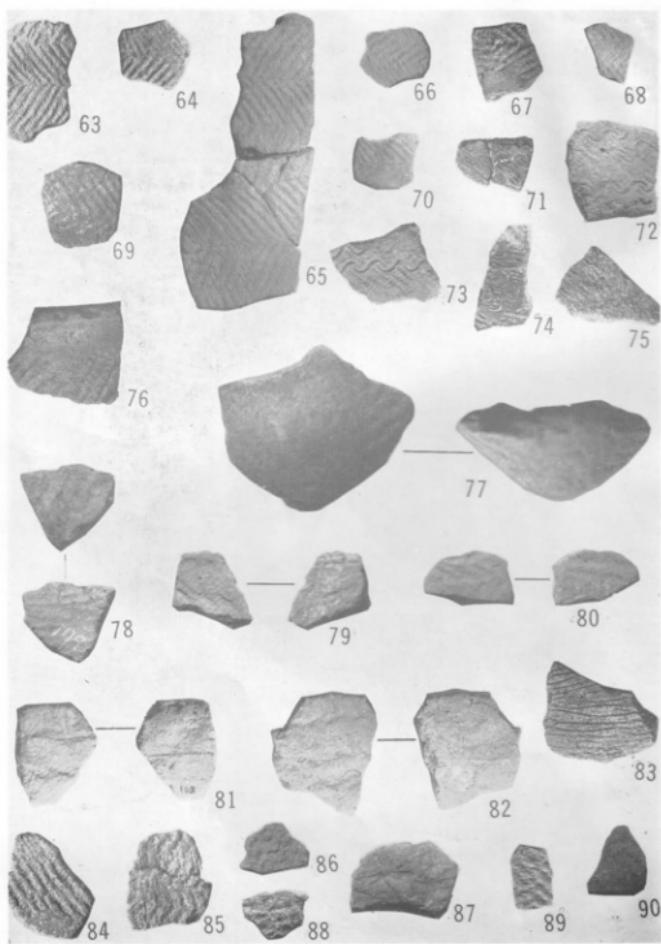
#### 参考文献

- 山内清男『日本先史土器図鑑』（昭14～16）  
磯崎正彦 1964『縄文土器各論一後期』（「原始美術」1）  
山内清男『縄文土器の終末』（「トルメン」1～6～7昭7）  
伊東信雄『東北北部の弥生式土器』（「文化」24～1）  
佐藤信之『山形県江戸の弥生式遺跡』（「古代」48昭42）  
山内清男 1929『関東北に於ける織維土器』（「史前学雑誌」1～4）  
上北考古会 1960『早留田貝塚』（「上北考古会報告」1）  
大場利夫 1954『函館市春日町遺跡出土の遺物について』（「北方文化研究報告」9）  
加藤 孝 1951『宮城県上川名貝塚の研究』（「宮城学院女子大学研究論文集」1）  
伊東信雄 1940『宮城県遠野郡不動堂村索山貝塚調査報告』（「奥羽史料調査部研究報告」9）  
江坂輝弥 1959『縄文早期文化』（「世界考古学大系」1）  
江坂輝弥 1951『縄文式文化一早期』（「歴史評論」5～2）  
江坂輝弥『回転押型文土器の研究』（「人誌59～8昭19）  
江坂輝弥 1964『縄文土器各論一早期の土器』（「原始美術」1）  
芹沢長介『神奈川県大丸遺跡の研究』（「駿台史学」7昭31）  
芹沢長介『岩手県蛇王洞穴』（「石器時代」7）  
興野義一『宮城県北部出土の押型文土器について』（「石器時代」7昭40）

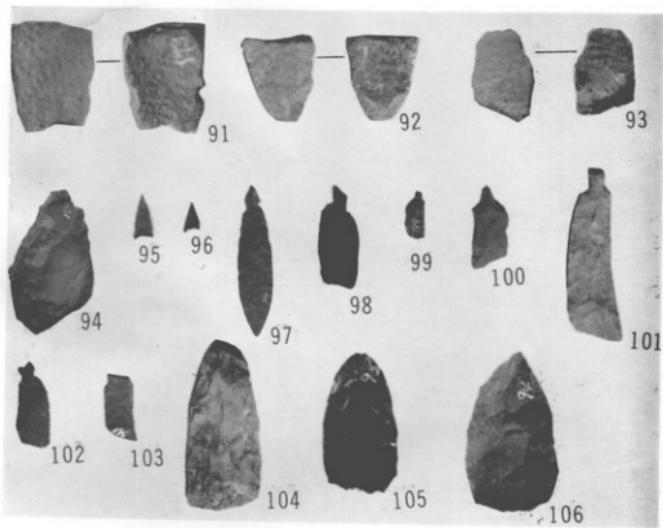
第7図



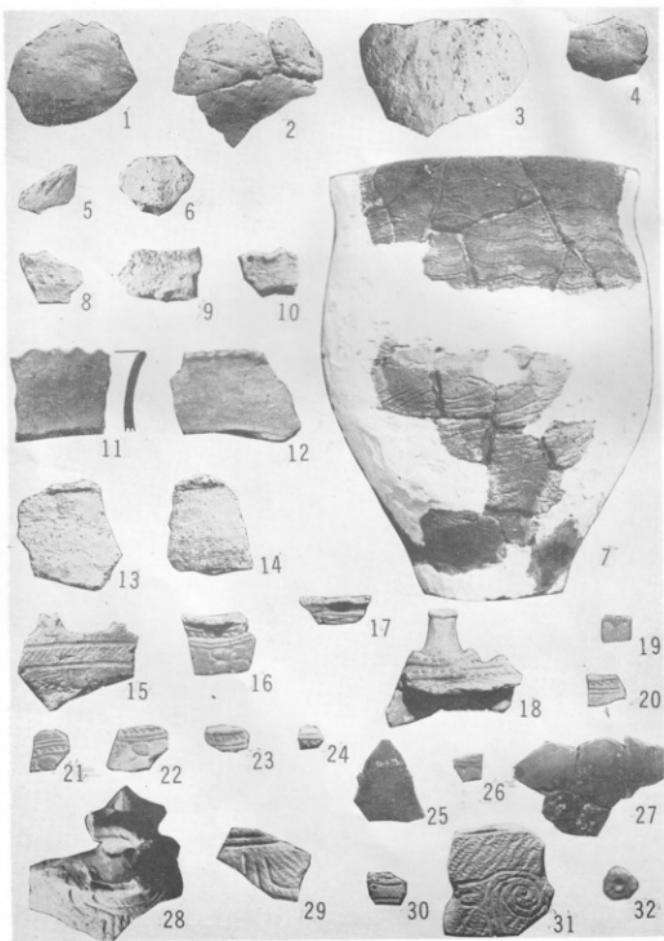
第 8 図



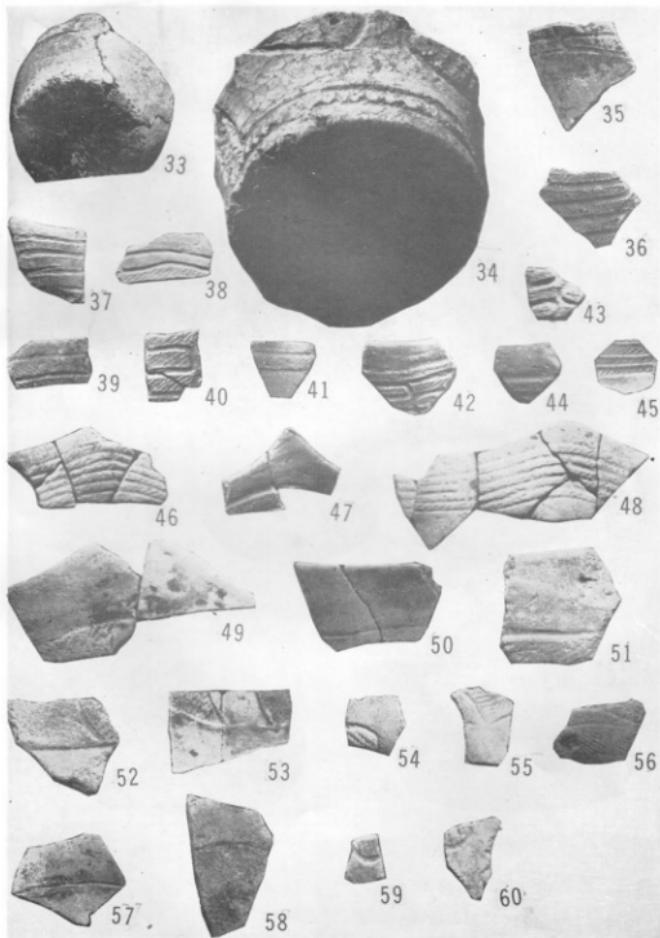
第9図



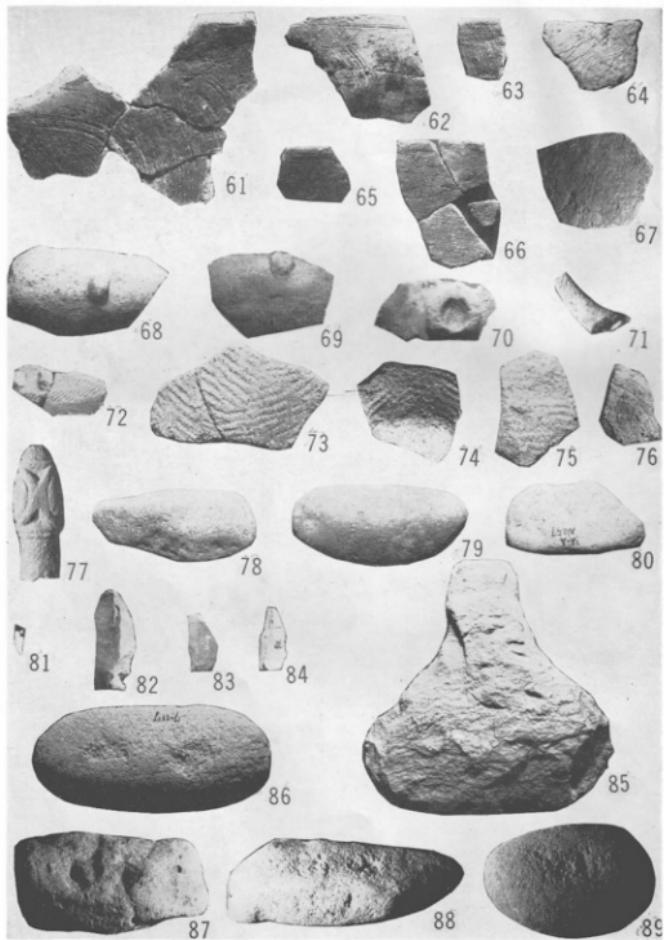
第 10 図



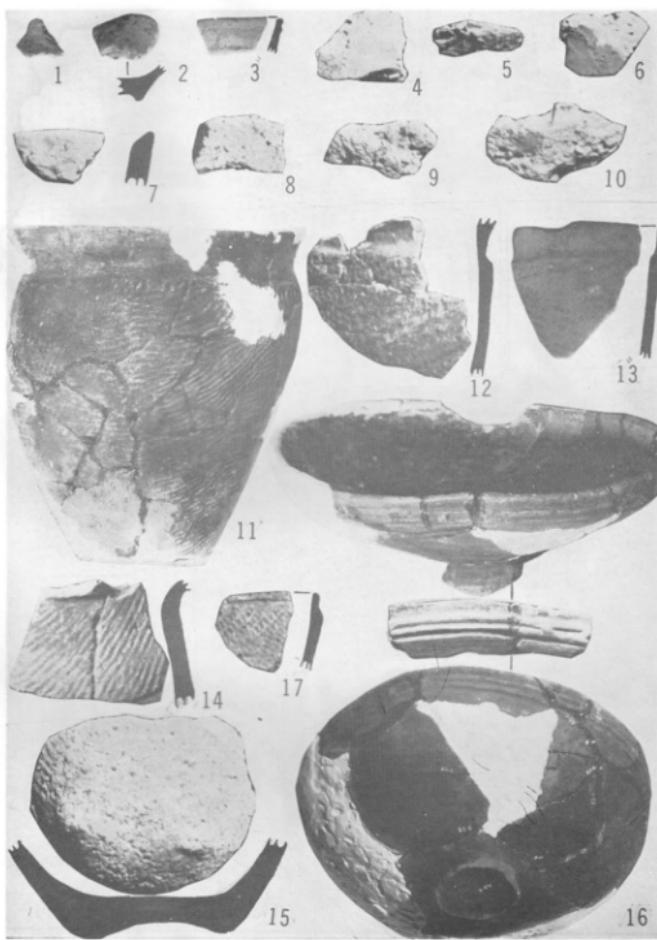
第 11 図



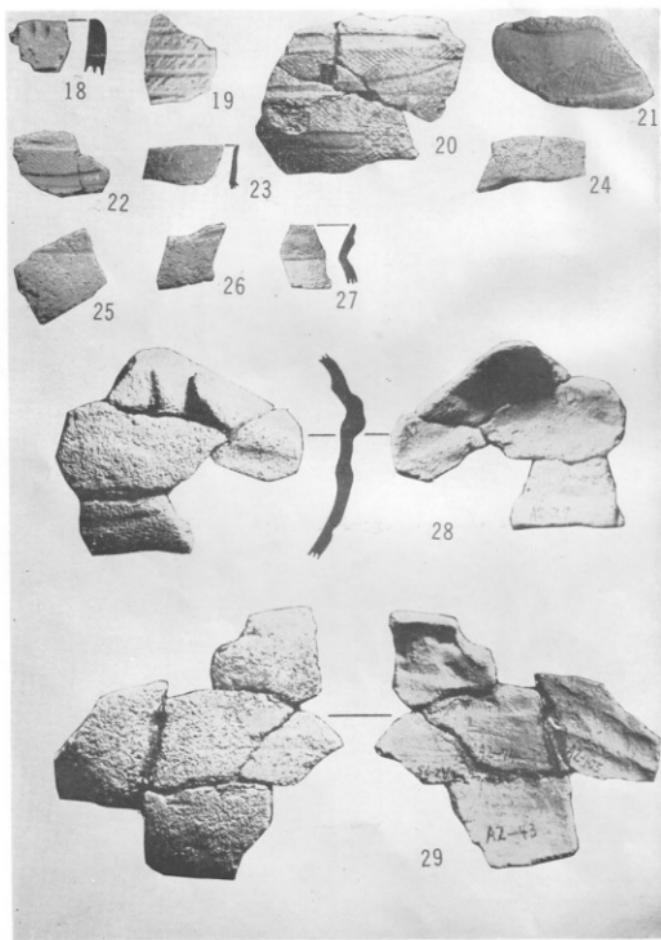
第 12 図



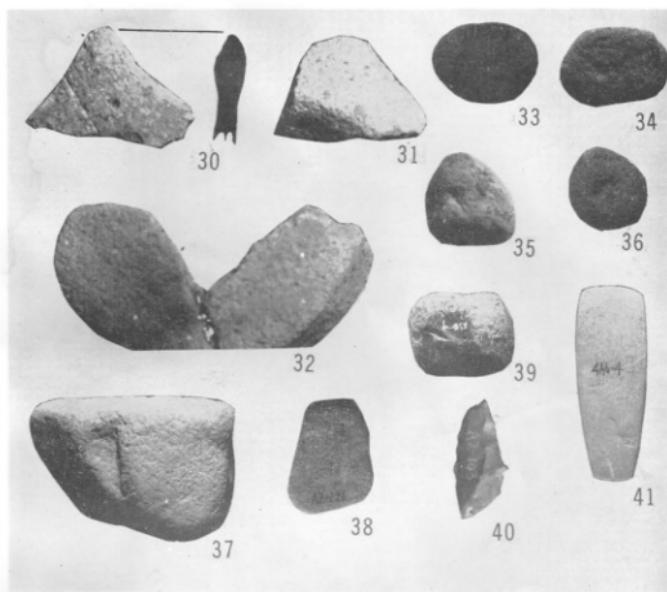
第 13 図



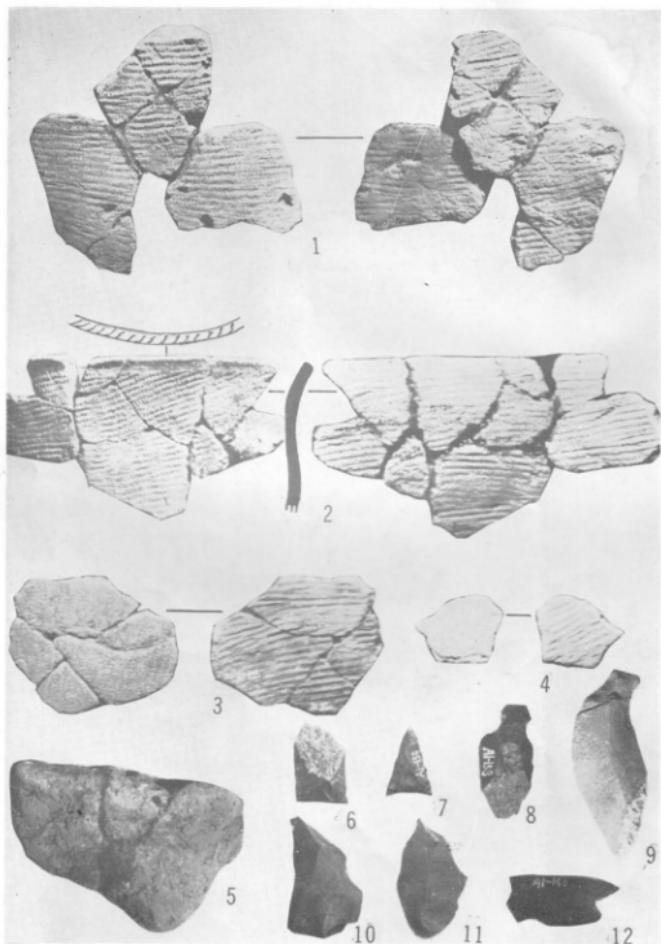
第 14 図



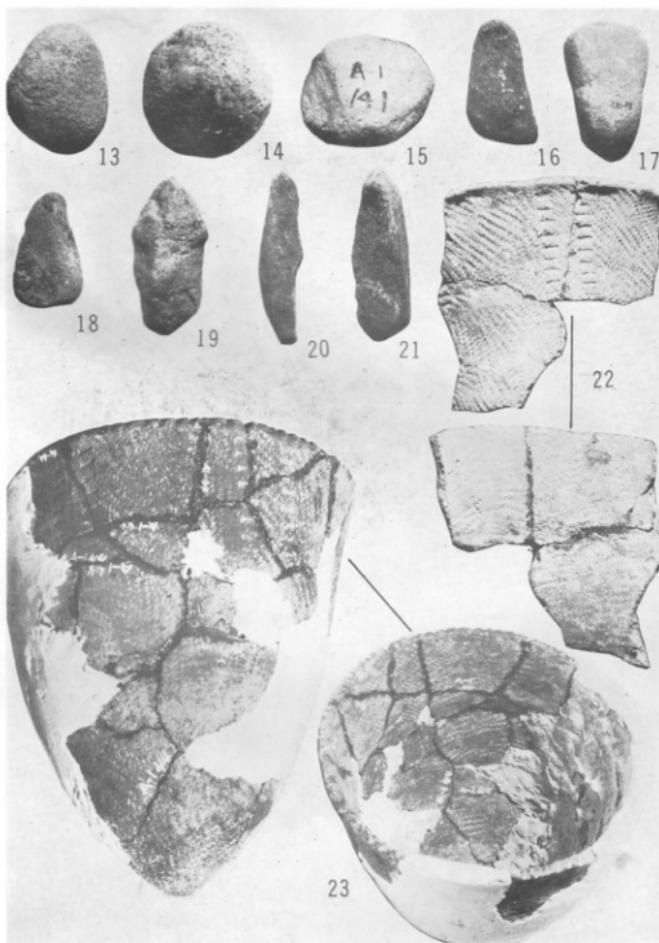
第 15 図



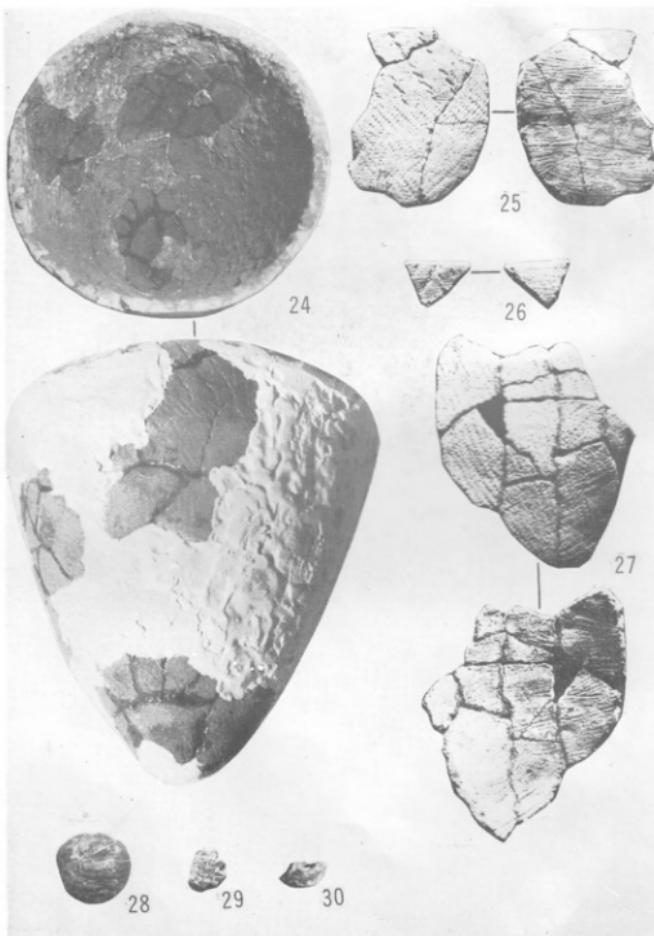
第 16 図



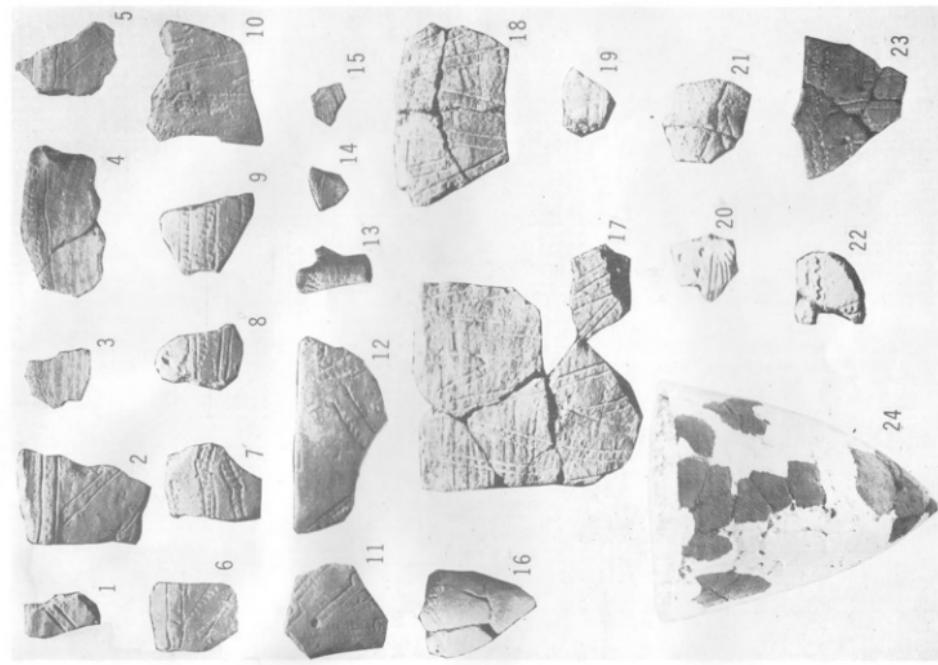
第 17 図



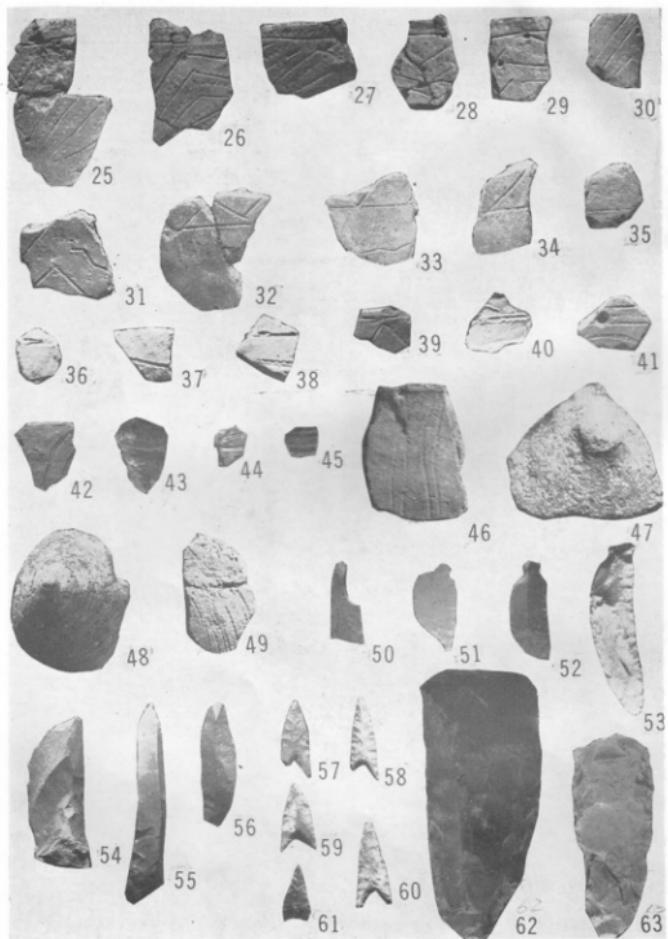
第 18 図



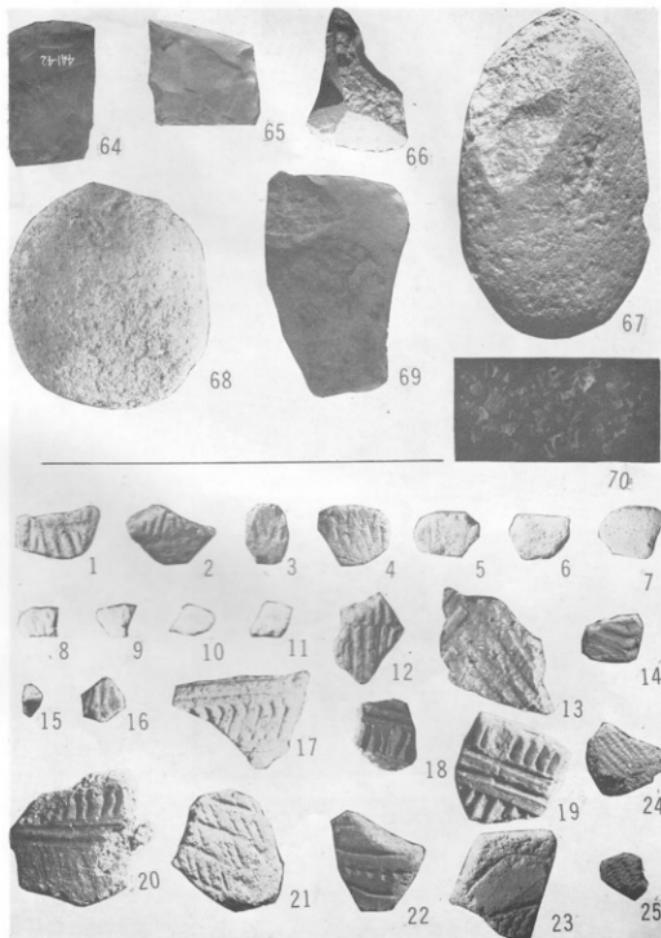
第 19 圖



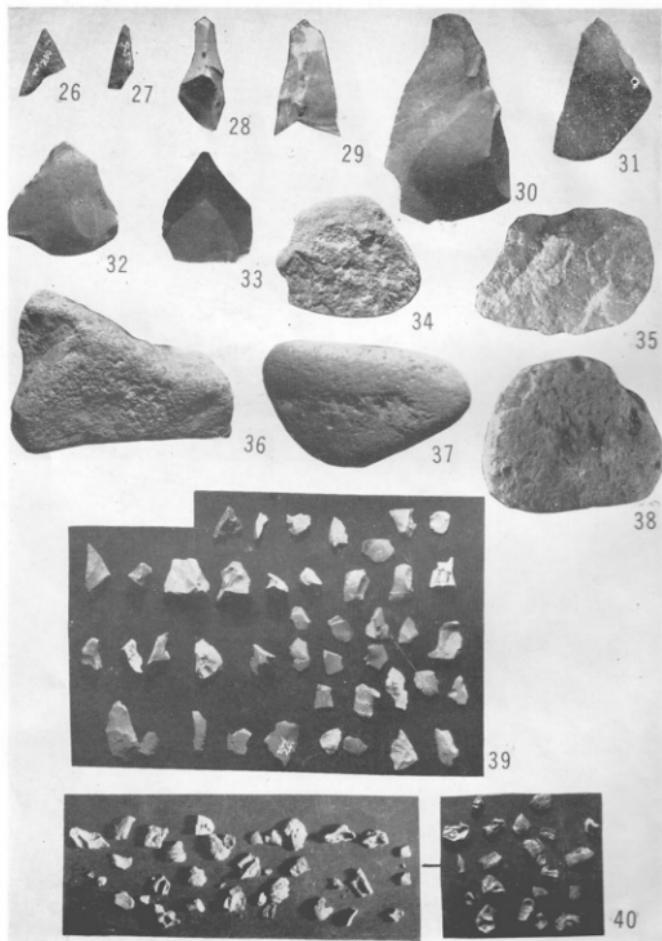
第 20 図



第 21 図



第 22 図



## 発掘調査員及び参加者名

### 調査員

山下孫継 日本考古学协会会员

國安 寛 県立湯沢北高等学校教諭

### 参加者

雄勝町院内 鈴木小五郎、阿部利一郎、根岸啓吉、柴田雄太郎、高橋庄太郎

国鉄職員 五十嵐芳郎

秋田大学々生 武石 孝、島山憲一、日野 久、田口京子

明治大学々生 菅原俊行、斎藤明夫

立正大学々生 高橋純子、藤橋俊夫

湯沢高校社会科同好会考古班 鈴木俊夫、本間庄太郎、柴田陽一郎、門脇正博、高橋福男、杉山広志、藤原周治、柴田清利、永井 要

湯沢北高校史学部 高橋恵美子、西村節子、菊地まり子、福島幸子、高橋光枝、藤原まり子、佐藤良子、佐藤若子、菅 良子、柏原栄子、金湖シゲ子、鈴木孝子、熊谷智恵子、小暮加代子、佐々木まり子、中島洋子、菅 文子

増田高校地下研究部 三浦富夫、阿部久一、高山安雄、柴田洋一郎、山内みね、大瀬サダ子、波部義広、田中 登、鈴木良子、上野恵子、井上哲郎、阿部幸子、島山礼子、佐藤洋子、内藤文子、遠藤康子、千田富子、斎藤節子、片倉由美子

羽後高校地歴研究部 飯塚省一、鈴木春幸、菊地京子、佐藤さち子、佐藤三枝子、伊勢静子、金せい子、佐藤悦夫、佐々木昌夫、大山修太郎、飯塚彰一、佐藤誠康、小坂伊知郎、井川昌二

### 事務担当

県教育庁社会教育課社教主事 吉川 欣一

同 課 文 化 財 係 主 任 児玉 正路

同 課 学芸員 富樫 泰時

雄勝町教育委員会社教主事 佐藤 忠

## あ　と　が　き

○本県は縄文時代の遺跡が非常に多い。しかしその中で縄文時代早期に属する遺跡は数ヶ所を数えるにすぎない。したがって縄文時代早期の研究がおくれており、その内容については不明な点が多くあった。

ところがこの岩井堂岩陰遺跡の発掘調査がおこなわれたことによって縄文時代早期の内容がかなりわかつってきた。特に貝鏡文土器の量が多く、この時期を研究するうえに欠くことのできない遺跡となった。

○今回の発跡調査には県南の湯沢高等学校、湯沢北高等学校、増田高等学校、羽後高等学校から多数の生徒が参加した。遅った学校の生徒が寝食をともにした十日間は色々な意味で意義があったと思う。特に夜の学習会は大学生をまじえておこなわれ、考古学についてはもちろん、各学校のクラブの様子やその悩みなどの語いがあった。今後の活躍を期待したい。

○本報告書は今年度発掘調査した結果だけでなく、山下氏を中心に昭和38年から昨年まで調査した結果をあわせ、総まとめしたものである。報告書の刊行にあたって山下孫雄氏他各員の多大のご支援がありました。ここに深く感謝する次第であります。

県社会教育課社教主事 吉川 欣一

雄勝町教育委員会 佐藤 正